

LICENSED PRODUCT
Black
3/Color
White
Magenta
Red
Yellow
Green
Cyan
Blue



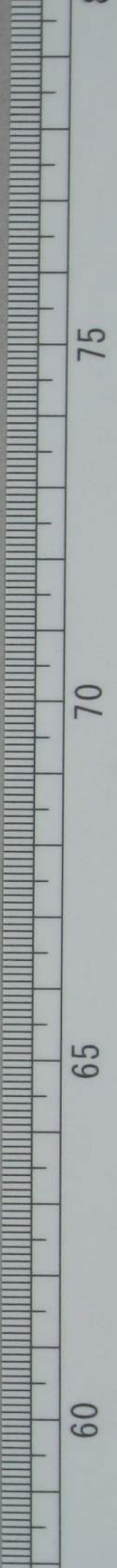
東京博文館藏版

新文林
上卷

大和田建樹著

編壹拾第

民國十年



60

65

70

75

新文林
上(國史文庫上編)大和日建指



本科二年生
高島

大和田建樹著

新文林

上卷

東京 博文館藏版

大和田建樹著

新文林

上卷

東京博文館藏版

新文林上卷目次

孤燈

| | |
|-----------|----|
| 序 | 二一 |
| 蝸牛の身 | 二一 |
| 花のころ | 二四 |
| 若葉 | 七 |
| ひさ雨 | 八 |
| 玉川 | 一〇 |
| 『隨筆』の序 | 一一 |
| 植木枝盛氏 | 一一 |
| 昔の作者 | 一二 |
| 花作る翁 | 一三 |
| 竹のみならんや | 一四 |
| 車夫 | 一四 |
| 秋草 | 一五 |
| 濟松寺 | 一六 |
| 古本屋 | 一七 |
| 忘るゝひまもあらじ | 一八 |
| 川づたひ | 一八 |
| 夏の花 | 一九 |
| 一人に向ひてすべし | 二二 |
| 文相撲 | 二三 |
| 敬字先生 | 二三 |
| 賞花園 | 二四 |

| | |
|--------|----|
| いひわけ | 二五 |
| 序文 | 二五 |
| わが山里 | 二六 |
| 舞樂 | 二七 |
| 住みたる處 | 二八 |
| ローザ | 二八 |
| 彼岸花 | 二九 |
| 入梅のまろし | 三〇 |
| よその墓 | 三〇 |
| 凌雲閣 | 三二 |
| はしわ | 三三 |
| 唱歌 | 三三 |
| 羽衣 | 三四 |
| 大江孝文翁 | 三四 |
| 苦が島 | 三五 |
| 紫陽花 | 三六 |
| ほろがや | 三七 |
| 火影 | 三七 |
| 九郎の言 | 三八 |
| 謠の評 | 三八 |
| 來客 | 三九 |
| 官吏 | 三九 |

目次

| | |
|---------|----|
| 室の梅 | 四〇 |
| すつぽん | 四一 |
| 千人をどり | 四二 |
| 都の家づきの序 | 四二 |
| 旅情 | 四三 |
| 逐天狗文 | 四四 |
| 名文名所 | 四五 |
| 樂人の子 | 四六 |
| 七夕祭 | 四七 |
| 長短論 | 四八 |
| 俗僧 | 四九 |
| 今夜の市 | 四九 |
| 思ふ人 | 五〇 |
| 猿の人まね | 五〇 |
| 車上にて | 五一 |
| 動物園 | 五三 |
| あげさする力 | 五四 |
| 盆の十六日 | 五五 |
| 天か人か | 五五 |
| 小人の争ひ | 五六 |
| 藤豆 | 五六 |
| 蓮の露 | 五七 |
| なからましかば | 五七 |
| 山と雲 | 五八 |
| 拂子貝 | 五九 |

| | |
|---------|----|
| 望高き鼠 | 五九 |
| 宅教授 | 六〇 |
| 蓮のわざ | 六二 |
| 烏瓜の花 | 六三 |
| 何がし伯の序 | 六三 |
| おほやけの虚言 | 六四 |
| しげ | 六四 |
| 日まほり | 六五 |
| 江の島鎌倉 | 六五 |
| 酒飲の親子 | 六八 |
| 今は昔 | 六八 |
| 舶來物 | 七一 |
| 束髪 | 七二 |
| あすの旅 | 七二 |
| 重代の寶 | 七三 |
| まことの友 | 七四 |
| かたわれ月 | 七四 |
| ひげそり | 七四 |
| 望月 | 七五 |
| 隣の娘 | 七七 |
| 田舎みやげ | 七七 |
| 雇教師 | 七八 |
| 住むは都 | 七八 |
| 鬼子母神 | 七八 |
| 童子の詩 | 八〇 |

| | |
|--------|----|
| わる口 | 八〇 |
| なほ些事 | 八一 |
| 秋になりぬ | 八一 |
| 八犬傳 | 八一 |
| さき子の碑 | 八三 |
| 萩寺 | 八四 |
| 箒の目 | 八四 |
| わが文庫 | 八五 |
| 犬 | 八六 |
| 讀書の時節 | 八七 |
| 舟辨慶 | 八八 |
| 能見巧者 | 八八 |
| 文人畫 | 八九 |
| 嘲弄家 | 八九 |
| 逗子 | 八九 |
| 追善の歌 | 九〇 |
| 日本橋通 | 九一 |
| 鎌なす月 | 九一 |
| 父のかたみ | 九二 |
| 棚の詩經 | 九二 |
| あすの幼稚園 | 九四 |
| 寺の名 | 九四 |
| 學者貧乏 | 九四 |
| 家鴨の聲 | 九五 |
| 秋の花 | 九五 |

| | |
|-------------|-----|
| 折もの | 九八 |
| 吹きあれたり | 九八 |
| 十五夜 | 九九 |
| 枯芦の色 | 九九 |
| 苦樂の故郷 | 一〇〇 |
| 獨立心 | 一〇三 |
| 栗一本 | 一〇三 |
| 花は見捨てず | 一〇四 |
| 前田藤九郎翁 | 一〇五 |
| 秋の色 | 一〇七 |
| 離なほつかれず | 一〇八 |
| ハウ嬢幼稚園唱歌集の序 | 一〇九 |
| 老婆 | 一一〇 |
| 暮秋の花 | 一一〇 |
| 古佛 | 一一一 |
| 師弟寫眞の裡に | 一一二 |
| 英譯 | 一一二 |
| 寒月 | 一一三 |
| 八景園 | 一一三 |
| 田舎祭 | 一一四 |
| 發車 | 一一五 |
| 菊のつぼみ | 一一五 |
| 幼時の樂しみ | 一一六 |
| 秋の暮 | 一一七 |
| 新聞號外 | 一一八 |

| | | | |
|--------|----|--------|----|
| 露語 | 一九 | 能面 | 二八 |
| 音戸の瀬戸 | 二〇 | ぬす人 | 二八 |
| 例の時刻 | 二〇 | お茶の水 | 二九 |
| 天長節 | 二一 | 今日も暮れぬ | 三〇 |
| 下宿屋すみ | 二二 | 小雀 | 三〇 |
| 大根 | 二二 | なまものじり | 三一 |
| 蟹 | 二三 | 新書齋 | 三二 |
| 觀世大夫の言 | 二三 | 手習の師 | 三二 |
| 招魂祭 | 二四 | 歌がらた | 三三 |
| ある夜の夢 | 二五 | 盃に告ぐ | 三四 |
| 瀧の川 | 二六 | 除夜 | 三五 |
| 冬いさ早し | 二七 | | |
| 夢の世 | | 香の煙 | 四一 |
| 涙の記 | 三一 | | |
| 笥の水 | | 亡き妹 | 七三 |
| 蓬摘 | 六五 | 妙義山 | 七四 |
| わが世界 | 六六 | 何をなげく | 七五 |
| わが思ふ影 | 六七 | 月の影 | 七五 |
| 夏の風 | 六九 | | |
| きのふの春 | 七二 | | |
| 草枕 | | | |
| 一夜の旅 | 七六 | 妙義碓氷 | 八八 |
| 御嶽まうで | 八〇 | 瀧めぐり | 九二 |

新文林上巻目次終

新文林上巻

大和田建樹 著

孤燈

序

官を免されたるは二十四年の春なりき。此頃より筆とりはじめ
て夜半孤燈の下にかきあつめたるそらろごどが積りては山の
如くになりけり。もとより何といふ題を定めたるにも非ねば
分類なせしむつかしき企にもあらず。いひたしまゝを人に妨
げられぬが何よりの愉快なるのみ。來年の我は今年の我あらま
ず。猶かきそへて死ぬるまではつゞけんと思ふ。

廿四年の春

蝸牛の身

おのれ竈を構へてより七年の間に家を移すこと六たびになりぬ。あるは水あしく土地しめりて身をおきがたく。あるは家ふるく床くちたるに。請へども家ぬしはつくろひてくれず。あるは北むきにて寒さが上にくらくなどして。いつもおちつきがたく。まれに心にかゝへるは。人に賣るとて追ひたてられしこともありて。つねに家負ひありく蝸牛の身ころわづらはしけれ。またも牛込のおくなる東横町にうつりぬ。されど此たびは長のすみかど定めれば。心盡して家をつくろひ。庭づくりなどもするなり。家は二棟にて六間廣からねども住むにはあまひあり。南むきに日あたりよく。かたへに木だちおほくて風よくとほせば。此上に何をかいはん。二つの棟のあはひをば。あらたに假初なる廊をわたして通路とす。西のはての六疊なるは坐敷にて。床よは弾く

人もなき琴を立ておき。あるはの好む能の道具などを之にそふ。夕日は直にさして堪へがたければ。軒に葡萄棚など設けんとぞ思ふ。ろれに續きて四疊なるを書齋とす。かたへには柵ありて。本とりちらし置くにたよりよし。座しながらほしき本も抜き出だすべく。倦めば歌集小説枕べに親しめり。よしや世人の道は絶ゆとも。鶯蛙は絶えず來りて友となるものを。庭はいと廣し。たゞ春草の原なりしを。かりはらひ山づくりなどしたれば。おもむきは日々にいで來ぬ。山吹萩かへで松など植ゑつ。いけ垣のもとには朝顔の種もまきつ。明日は躑躅をや添へまし。卯花をや移さまし。望ある住居とはなりぬるかな。

竹のうへに月ものぼりぬ世の中の

富も位もしらせがほにて

花のころ

花の頃の習にや霞みながらに曇りたれど。さすがに降らんともせず。近きあたりの花見んとて。妻子どもたづさへて晝頃より家を出づ。まづ小石川よりゆくに。傳通院の花はや、過ぎたれど。大黒堂の前の二本はなほ雪を戦はして春深し。氷川神社を右にして田つらの路をゆく。見れば雲ちらぬ方もなし。子どもは唱歌など口ずさみつゝ土筆つみあそぶ。名も知らぬ寺を訪へば落花の風ひとり昔を語りがほなり。音羽を過ぎて雑司谷の鬼子母神にいたる。佛前いと静にて椿のこぼれたる上に鶏の群れあそぶもなつかし。櫻はこゝには見えぬ。山吹の垣根もたわに咲き亂れたるに。木蓮花の鳥に踏まれて一花おちたるなど。いづれにか春の心をわかたまし。すべていつにてもそゝろあるきせんは田舎わたりこそあれ。(其二)

家にありかぬるは此頃の習をか。今日は花よりも寧ろ人見んとて向島にゆく。今戸の渡には。上り下りの道を繩してわかちつゝ。巡查ふたり非常をいましめ居たり。花の下のうるさゝまづおしはかるべし。舟より見れば堤は一筋の雲なるに。人は堤の上に堤なしてひまもなし。川上にい赤き青きさまゝの旗を吹きなびかせて。小舟あまたうかべたるは。例の漕ぎくらべなるべし。かなたより渡し来る舟のちがひざまに。我かたに瓢草ふりむけ水うちかけなぞ戯むれつゝ。はゝと笑ふは。生酔の歸さぞ見ゆる。男は女によそほひし。女は男のかづらせるなど。心々にいでたつもあり。これも太平のすがたにやあらん。さるにても明日の苦しみこそ思ひやられるれ。辛うじて梅若塚に來ぬれば。こゝまでは殺風景も蹂躪せず。花にかゝよふ夕日かけも。はじめてわが物の心地ぞせらる。(其二)

夢さめて聞けば軒の玉水ころ響くなれ。明けなば小金井の花に
 と思ひしを頼みがたきは人心のみにもあらじ。さらばとてふた
 び枕とりたる程。雨やみぬとて。妻は辨當と、のへなぞする
 なり。あな樂しぬれてもよしやとて。新宿より汽車にのる。雲やう
 く破れて日影は菜の花に。よほひ初めたり。國分寺よりわたりて
 麥あをき田舎道を幾町もゆくに。塵さく風もなければいと心地
 よし。堀づたひに一里あるべし。一筋の流を中におきて花の木ど
 も立ちつゝくさま。空も一つにぞ見ゆる。かへり見ればとゞむる
 が如く。さきをのぞめば招くに似たり。天つ少女や袖ふりつれて
 花にたはむれ遊ぶらん。二十五菩薩や花うち降らして香れる雲
 につたふらん。ほろく、とこぼれては水にたゞよふもあり。草葉
 にとまるはにほひある霰をふみゆくこゝちす。ほとよき木蔭に
 盃かたむけつ、思へば。人の世も何もわすればてけるかな。天地

たゞ花の中にて。春風に酔はぬ人こそあけれ。いでやこゝに流を
 とほし。こゝに櫻うゑけん昔の人を呼び覺しても見せまほしき
 は。けふの春ぞかし。村また村の花ねくり花むかへて。歸さの汽車
 は新宿につきぬ。夕ぐれの空あたゝかに霞みて。星も花と見ゆる
 夜のさまなり。月ものぼりぬ家路も近し。思へば神のめぐみこそ
 うれしけれ。(其三)

若葉

廿四年の夏

一日若葉見んとて。高田より目白の不動あたりをそゞろあるき
 す。八幡宮は櫻楓いてふなぞのみどりにつゝまれて。しめやかな
 るに麓の原は蓮花草さかりにて。蝶の白き黄なる羽ね打ちひろ
 げ。遠く近く飛びちがふもなつかし。それ追はんとて乳兒おひな
 がらかけゆく少女の田舎めきたる。かへりて興あり。田道をはる

くどゆくに苗代水いと心地よくたへて。鮒目高なと馳せゆくあどのにござると見れば忽にすみて。又むらがりくるなど。樂しき小世界なり。足音にもおどろかぬ蛙の時得がほにききつれたる。神代のまゝの聲にやあらん。小川の岸に萩薄など。ひとつ色に生ひかさなりたるに。覆盆子の花の咲きまじれる。あはれ春風の愛はいづこまでかれよぶらん。不動の岡よりうちのぞめは。赤城築土牛天神の森すべて目の前にて。もえぎの衣心もくかぎりなるに。里々はうすく霞みて。五月はじめなれば鯉のぼりのひらめきわたるさま。なほ人間界もうれひなきに似たり。歌思ふ心も富み。讀書にうみつる氣もはれぬ。誰か散歩に。時失ふとはなげくらん。

ひと雨

ひと雨しめりぬ。日ましに庭の景色こそとゝのひゆくなれ。垣の

もとには。朝顔えぞぎくあどの種もまじへまきたれば。蝶の羽ねをひろぐるやうにあすはおひいでなん。芭蕉藤袴など一寸ほぞ芽をいだしたるを隣よりもらひ來て。竹たてゝ子どもの踏まぬやうにす。

池を堀らんとするに。淺くてはいたちなどの魚とらんれられありといへば。四斗樽をうづめて水をたへ。めぐりに石をあつめて堤とし。それにつゝじを植ゑたれば。紅ははや波を染めたり。めだかなど放ちて。讀書うみたる晝中の友とす。

これも彼等がための安樂世界とて。子どもものなげやる麩に口よせては。浮びいづいとたのしげなり。朝露にぬれたる櫻や李の青葉がくれに愛らしき實の玉をならべたるもうれし。肱まくらし。て謠本ひろげつゝ茶をよぶに。めのわらはのもて來たるは。かをり常のならず。思ひ出でたりを。とつひ新製せしといふ庭のころ

これなれ。

玉川

いづくを見ても若葉の青々どにほひわたるこそ心地よけれ。かりそめなる賤が垣ねに野いばら枳殻などの花を見つけたるもよし。豌豆の花の咲きひろごりたるもよし。芍薬にもあれ牡丹杜若にもあれ。作りて見する家たづねて立ち入るに。女の童いでむかへて新茶すゝむるもよし。一とせ友うちつれて玉川に船遊せし事は六月のはじめにやありけん。漁夫のうちおろす網にかゝりて鮎の船板よをざりたる。まづたのし。小魚すくはんとて水にとびおるゝもあり。漁夫の網かりてふつゝかに腕うちひろげぬらひまはすもあり。どかくするまに三つ四つの籠にも満ちぬ。笹の葉につらぬきつゝ家づとにするなど心々なり。かへさは月に

送らせんとて川を下るに。夕日のなごり平なる水を焦して畫も及ばず。酒盡きたれど魚なほ舟の籠にあり。ことしもその頃なるべし。心は動けど昔の友なきを如何せん。

『隨筆』の序

野の末に流れあり。草陰に三つ五ついちごの花も見ゆ。かゝる所を行くともなしにそゝろありきするいと樂し。隨筆よむはこれにや似たるらん。董たんばゝ嫁菜蓮華草うるにまかせて摘みあつめたり。隨筆かゝんこそ更にたのしけれ。春雨しづかに降りくらす夕べ。かねの音近く更け行く霜夜など。つれづれの友はたゞこれのみ。三木よし子は隨筆めく物作りて見聞く事でもしるして見んと云ふ。つとめよく人樂しませんにはまづ自らがたのしまざるべからず。春風は蝶を吹きて野に待てり。

植木枝盛氏

自由黨にさる人ありと聞こえつる植木枝盛氏逝けり。何とかいはん。されどおのれは一面識もなし。又自由黨に關係もなし。たゞ吉松ます子の紹介によりて文學上の關係を生せんとせし人なるをと思へば。嘆息やむ能はず。まして過去に未來に氏を推して代議士と頼む高知人の失望いかにぞや。日くれ風寒し。遺墨の消息はまだ机の邊にあり。

昔の作者

昔し塙檢校に人の徒然草注釋の事など問ひしに。近頃の抄物はいづれも委しく出來たれど。作者の兼好のうれ程物知りにてはなかりしならんと答へしといふ話を。誰かの隨筆にて見たり。さ

れどこれのよし。近年批評家など自稱して古歌を評し古文をいひくたす輩の。作者の力をもえはからずしてみだりに譽め毀る類ひのみぞ多かる。檢校世にあらば。昔の作者はそれ程文旨にはあらざりしとやいふらん。

花作る翁

わが住むあたりに杜若つくる翁あり。廣き庭をば皆花にして人に見するを樂しみとす。花のおのれも貰ひて瓶にさしつるが。根を分けてと人の乞へば必ずいなみて。不用なるが。ありても世に別つ事なしと。聞く人ごとに皆笑ふ。然るに世の大家博士にして。珍らしき古文書など。何を得たり。彼を藏せりとほこりつゝ。人の見たしといふには。今は手もとに。あらずなどのがれて。必ず見せぬ人あり。花をしむ翁にいづれぞや。

竹のみならんや

時雨をも霰をも聞かんには竹こそよけれ。葉に置く露に月のさし添ひたるもよし。雪のうち散りたるもおもしろし。さればこそ窓近く植ゑたるに。植木屋の來て知らぬ間に軒より下なるをば。枝も葉も皆拂ひ去りぬ。いかでかくはと咎むれば。竹の爲めにありしければとてしたり顔なり。其物を愛して其用ひを失はしむるためし。世にはいと多し。竹のみならんや。

車夫

車に乗りて行くに。此處をまがらば近からん。あの橋を渡りてなぞいへば。車夫はいと不興げに物もいはず。たゞ約束しつる所をさしてぞ行く。すでにまかせて後にさしづせらるゝ腹だゝしさ

は。車夫なほ然り。況んや大いなるものをや。

秋草

秋草植うる處は數多あれど。向島の花屋敷に及ぶいまだ知らず。されば殘暑を侵して此處に遊ぶを年毎の習ひとはせり。女郎花の丈高くなまめき立てる。尾花の細やかに糸を見せそめたるなどは更なり。數にもあらぬ螢草水引やうの物まであはれなるは。秋風にひかるゝ心ぐせにやあらん。

今年は庭を野邊にして見んと思へば。其苗かはんとて彼園を訪ふ。頃は夏のはじめなれば。若葉の梢つやゝかにて。梅の實の鈴なぞ懸けたるやうに。葉がくれに三つ五つ見ゆるも心地よし。芍葉の色薔薇の香。いづれおろかならんや。あるじに根分の事をはかれば。やがて鋤取り出でゝ云ふまゝに六種七種堀り來て與ふ。

同じ緑ながら白みが、れる鋸葉の五寸ばかりなるは女郎花。これに似て葉色濃く莖の赤きは藤袴。其外は野菊、荳蔻など。それそれ根をことに包み分けたり。歸らばこれは垣の下に。彼は山のそばに植ゑてん。あすよりは疾く起き出で、水そ、がんなど。思ふく、隅田堤を來るもたのし。

濟松寺

家の西に寺あり。濟松寺といふ。朝疾く散歩するには程よき處なり。木魚の聲、讀經の聲、心まづ澄み渡る。うしろの方の野邊につゞきて、夏の初なれば名も知らぬ草、あまた咲き亂れたり。霞のちりとまされるやうなるもあれば、黄なる玉をぬきたる如きもあり。紫紅さまざまなるに、日のさしそめたれば、風に知られぬ露は五色にも七色にもきらめき渡りて、足ふみ入れんやうもなし。北の方

には薄霧につゝまれながら、目白の岡の詠めやらるゝもれもしろし。朝飯熟したりとて、女の童よびに來る。七時なるべし。彼岡の鐘も今ぞひびく。

古本屋

いとまある日に古本屋を見あるくほぞ、樂しきはなし。知らぬ本を見いだしたるもうれし。童の頃見たる本など、其後ほしと思へど、手に入らざりしに、ふと見つけたるは、ゆくへ失ひし兄弟にもめぐりあひぬること、ちす。買ひ集め歸りて、枕もとに燈ひきよせつゝ、披きゆくに、心おぼえある大家の自筆して、挟みおきけん切紙などの出でたるうれしさよ。赤く青く校合に手を入れたる跡のみゆるも、藏書印のあざやかなるも、すべてなつかし。本もいかに舊主戀しとおもふらん。

忘るゝひまもあらし

観世家にて。毎週二度づゝ日を定めて八番づゝ能の稽古をすべしと二三人うちよりはかりしとき。一人があまりしげくておぼゆるひまなしといひしに。今一人こたへて。されば忘るゝひまもあらしとぞいひし。

川づたひ

文かきくたびれて散歩せんと思ひありぬ。入日に近し遠くまではとて。關口を川づたひす。このほど落花たづねんとて來し折には。水の面に四五寸ばかり生ひいでつる若芦も。心地よく並みしげりて。風を我物がほなり。堤のすゝき堀りかへりて庭になぞ思ひしは昔にて。今は身をも隠しつべし。小田の苗代のびそろひて。

五月雨まつらんと思ふものもし。子どもにおとなもまじりて竿もてあそぶあり。何をか釣るらん。はやくも汀したしき頃とはなりぬるかな。ほそき流にそひて歸るに。子どものあれとりてといふを見れば卯花なり。これも樂しかれも樂し。

夏の花

秋草は七つといへど。夏の花は數へたる人もなし。名の知られぬにかへりてあはれなるもあれば。人の數へぬものとて捨つべきにあらず。晝顔の青葉すゝしげに籬梢ともいはすはひかゝりて風になびくさま。山里めきて世ばなれたり。花のさそ薄化粧せる少女の顔に夕日のにほふこゝちぞせらるゝ。野ばらなぞ咲きまじれるひまより見入るれば。賤がやの軒には。鮎貝に植ゑてつりおろしたる雪の下こそ盛りなれ。花はげに雪

のやうに白きに根は赤き糸をくりおろしたるこゝちして長々とさがるさきより小さき葉のいでたるこゝちよげなり。

はしりゆく水のきはに白く咲けるは覆盆子なるべし。かたへにはやゝ赤らみたる實も見ゆ。野はたゞまげりにしげれる中より百合紫陽花など見つけたるいとなつかし。一とせ信濃路の旅せしに朝露のまだひぬうちにと宿りを出で、山路にかゝるほど、白く赤くさまざまに手をあげて招くやうなりしは、今も目にあり。

安房の浦めぐりせし時。とほく見ればまことに白波のよせくるさまして咲きつゞける花を問へば、濱木綿とぞいひし。さどくる夕立になびきふしつる涼しさよ。

わが田舎にてもじすりといふ花あり。東京にては何といふらん。小さく長き莖のさきをまどひて。紅または紅白のしぼりなとね

ぢれたるやうに咲くなり。童の頃ほりかへりて庭に植ゑし事もありき。葉は短く蘭に似て莖のもとにむらがりおふ。

螢籠さけて野にいづれば青き花の葉がくれに見えたるもうれし。この花を東京にて螢草といふは虫にはまする草なればにやとおもひしに。よく見ればまことに羽うちひろげて飛ぶさまにこそ似たりけれ。四國などにては鎌つかとよぶ。

なでしこは露にぬれたる殊にうつくし。霧たちわたれる朝ぼらけ。少しふりたる雨の後など。

蚊屋つりといふは。子どもの引き裂いて蚊屋につくりあそぶ花なり。花火線香といふは。穂の出でたるがそれに似たればなるべし。やりんぼといふは。鎗の穂先にたとへてや名づけつらん。これらはわが童より聞きなれつる名ぞかし。何ならぬものなれどにくゝもあらず。

松葉ぼたんといふ花。黄なるも紅なるもあり。蟬の聲しぐれわたりて起きつる草葉もみぬぬ日ざかりに。ひとり誇らしげなるが愛らしきなり。

田にても池沼にても。浮草やうのものに咲き出でたる花みなおはれなり。うす紅にて蝶のとまりしやうなるもあり。白く鳥の毛などに似たるもあり。黄なる花びらの菖蒲まこもまじりて見ぬかくれするなど。水邊ころすべて戀しかりけれ。英吉利にはわれわするなどいふ草ありとさく。名はおもしろけれと其物はよしやあしや。

一人に向ひてすべし

観世清孝門人を戒めて曰く。能は見物人のすべてを感せしめんとする事なかれ。たゞその中の一人にむかひてすべし。必ず心專

になりてよく出来るものなりと。ひとり此藝にかぎるべからず。

文相撲

文相撲といふ狂言あり。大名相撲にまけてくちをしさに。相撲の傳書を懐中してかゝりしに猶負けしかば。相撲の書不用なりとて引き裂き捨つるさまをつくれり。筆記をあてにする學生に見せたし。

敬宇先生

學和漢洋を兼ねて愛博く徳高く。温厚善良の博士はと問はゞ。必ず中村敬宇先生と答ふべし。先生の功業ハ學校に著術に世人のしる事なれば更にいはす。先生近頃中風の氣味ありしが。昨日午後二時つひに藥石そのかひなく。長きねむりにつかれしとさく。

こそかなしけれ。去年のこの頃なりき。南摩翁とはじめて先生を
訪ひしに。先生白き鬚をかきなでつゝ、明治唱歌をとりいだし。君
の名はこれにてしれり。君の作もこれにて知れり。『學の力』のうた
こそおもしろけれなど。にこやかにかたられし事。今なほ目にあ
るものを。洋酒の口を手づからはなして進められしさまも見る
やうなるを。あはれ世の中なるかな。門の若葉は陰を深めて今日
も先生の車を送らんとや待つらん。先生ことしは六十と聞く。

賞花園

夕日かくれてのち。厩橋をわたりて本所松倉町の賞花園をとふ。
新聞にをしへられたるなり。園のまなかは池にて。浮草しげく緑
を敷きたるに。小さき虫のところ／＼に波たてありく。まづすゝ
し。そらの紅もうつりてはえあり。池は見渡す限り花菖蒲ならざ

るなし。鶯の芦間にたてる。蝶の葉かげに眠れる。燕の羽うちやす
むるなど。さまざまなるは。みる人にすき／＼あればなるべし。花
の種類は三百にも及ぶといふ。

いひわけ

昔は本の序に。先生ゆるさゞりしを書肆の乞ふ事再三におよび
て。はじめ草稿をあたへられたるよしをのぶる癖あり。今は演
説の前おきに。近ごろ多忙にて。草稿をつくるひまなきを。一夜づ
くりの種なれば。誤もあるべしなどいふを常とす。むかしのは。丁
寧にすぐるをしめし。今のは。聴衆をあなざるに似たり。言譯にも
よしあしあり。

序文

古書の序は大かた自序にてその書のなれるよしをのべたれば
 實にてよむに益あり。後世のは人にたのみて体裁をつくるふに
 すぎざれば。虚禮にておもしろくもをかしくもなし。されどその
 道の博士先達。または心へだてぬ朋友師弟などにかゝせたるは
 なほ實あり。かの縁もなく道もことなる伯爵從二位などの紹介
 によりて著書の價をつけんとすることあやしけれ。國學者の本
 の中にい。玉だすきの序。古文徵開題記の序いとおもしろし。

わが山里

畑に卷葉を見せたるは芋なり。月見の祭せんとて妻はよろこぶ。
 村雨の露みんためたまきたるを。垣に角をさゝげたるは竹子な
 り。子どもは見ぬまに抜きとりて手桶につくりし。雀のやどと
 たのみしものを。紫蘇は植ゑぬにはびこりて風さへかうばし。あ

はれ市には魚や貴からん。わが山里の豆腐うる聲今日も聞ゆ。

舞樂

舞樂といふもの、中に昔おもひやられてなつかしくおもしろ
 きは。わが國にて出來たる曲にしくはあし。春庭花の躑躅を。承和
 樂は黄菊をかざして舞ひ出でたるに。下襲のすその入りちがひ
 たるなごいふべき詞もなし。唐のものにていつも心のうきたつ
 は。陵王還城樂なり。笛一つにて吹きたてたる。似るものもなし。東
 遊こそ神さびて。住吉の松蔭にて舞ひけんさまなどおもひいで
 らるれ。和琴のしらべも古雅なるに。摺衣に太刀はきたる姿が
 うつくしき。胡蝶鳥の童舞は。むかしの人もすでにいへり。打球樂
 の今めのまへにのこりたるは。上手のせしを見し故なるべし。何
 とかいひし舞人の名はわすれたれど。山下の博物館にてありし

時の事なり。あゝこの舞樂も今はみるべきたよりなし。五六年前までは式部寮の雅樂所にては縦覽ゆるされしものを。

住みたる處

まばしにても住みたる處はわすれがたし。京橋にありける頃。夜ふけて銀坐あたりを散歩するに。瓦斯燈のかげゆく人もやうやうまばらにて。今ぞ柳の枝にはのくくと月のかすめる。いとのかかり。または氷うる少女。虫賣る翁など。まだのこれる荷を家路に送らんとするひかり。さむきまで身にしむこゝちす。冬は履の音按摩の笛なごさえわたるに。葉もなき柳の街にゑがゝれたるこそさびしけれ。これはこの頃一夜とほりて思ひ出でたるなり。

ローザ

文ならふ少女たちに。夢といふ題をあたへてかたりけるやう。おのれ羅甸の文法を習ひはじめし頃。ローザ(薔薇)といふ詞の變化を骨をりてそらんせし夜の夢こそをかしかりしか。うす紅の衣に同じ色の帽子きたる少女四五人。うちつれてわがそらんずる詞を歌にうたひつゝ舞ひいでたるうつくしさ。今に目にあるやうなりといへば。かゝる夢こそ見たけれどて人々わらふ。

彼岸花

秋のはじめ向島を逍遙せしに。西洋人のあまたして彼岸花をつみわたるにあひぬ。かれはかゝる花をや愛すらん。わが國人は毒らしとていたく忌みさらふものを。かはるは東西の人情ぞかし。此花は處によりて天蓋花幽靈花死人花などいふ。

入梅の志るし

朝けはて、庭に向ふに。子ども、起きいで、花のつぼみをかぞへ。金魚に麩をやりなぞす。入梅の志る志みわて。空は薄墨なるに。栗の花のいと白う森をおほひて見やられたるよ。さまでは思はざりしもの、時によりて心ひくたぐひなるべし。雀の聲もあたりをはなれず。

よその墓

わが父の事起りてより通ひなれて見るに。よその墓も今はしたしうなりぬ。

若草もえそめて日かげあた、かく霞みわたれるに。檜に紅梅とりませて母姉やうの人のまうづるを見れば。卒都婆の文字もまだわたらし。最愛の娘を失ひつるにや。何がし童女とぞ讀まれ

たる。春風は誰がためにかとあはれなり。

志るしばかりに立てたる墓じるしも傾き。花筒も雨に朽ちて半うづもれぬ。夏草は時を得て丈にあまるほど蓬わかざなぞ生ひたちたれど。来てはらふ親類もなきにやあらん。薊の花ぞひとり吊らひがほなる。學問修業に遠國よりはるく、きつるが半にてたふれし人々もかゝる中にはあるべし。

昨日までは奥ふかき殿のうちに住みて。侍女なぞあまた使ひつる身のこゝに來ては垣ひとへを隔てにて。ゆき、の人もは、かられず。風雨にさらさるゝこそあはれなれ。宮位のみ石のおもてに高くあふがれても何かせん。

盆の頃は桔梗女郎花などうちかたげ。水桶ひきさげて男どものゆきちがふさま。にぎはしげなるもなほかなし。青竹わたして提灯さげたるもあり。香のけむりこゝかしこになびきあひたり。む

かへてまもなき妻にわかれ。百年もと契りけん夫をさきだて。ひ
 とり子におくれ父母にはなれなど。嘆きは盡せぬ世なりけり。
 朝霜はなごりなく消えて。日いとのどかなる小春空に。殘菊南天
 などたむけつゝ。手づから草箒して。落葉はきよする老人も見ゆ。
 ふる花をさしかへんとて。引き抜けば。氷のつきてあがりたるを
 うち捨つるに。霞のやうに碎けて。日かげに残れるも心ぼそし。

凌雲閣

淺草の邊に住む人あり。近頃公園に凌雲閣とて五階の樓立ちて
 より。終夜そのともし火に照らさるゝためか。庭に虫の音をたや
 したりとかたる。さきには瀛車のひゞきにおそれて。東京には時
 鳥住ますと聞きつるに。今また此事ありものゝさしひゞきはお
 もはぬ處に来るぞかし。開明と風流とは相ともなはぬものによ。

はしる

夏の夜のはしる。するこそよけれ。子どもものさげて。歸りし螢籠に
 草かひ水かけなどして。軒につりたれば。はや光は前に落ち來ぬ。
 水の音もたゞこゝもとなり。星のかず見るくまさりゆきて。今
 は空をうづめたり。あの星は何にか似たると。一人がいへば。落花
 ならん水玉ならん。いな霞にぞたとふべきなど。おとなどもまで
 いひあふもたのし。

唱歌

近頃小學校にてうたふ唱歌は。西洋の譜に日本の歌をつけたる
 が多し。これにては人を感せしむる作のいづべきやうなしとは。
 歌よみの論なり。いや西洋にても大家の曲ありて後に歌のいで

きたる例は少なうらぬものを。活氣なき七五調の歌にのみ譜を
つけんには雄壯絶妙の作を望みがたしとは。音楽者の論なり。さ
れどよきはよくあしきはあし。いづれとも限るべからず。

羽衣

羽衣といふ能は。天人の飛行を得る翼を漁夫に奪はれて月宮殿
にかへる事かなはず。今は千鳥かもめの波に飛ぶさへ羨ましく
よわりはてたるさまを作れるなり。世に此翼をもてる人いくた
りかある。又此翼を奪はるゝたぐひまたいくたりかある。

大江孝文翁

大江孝文翁といふは阿波の人にて。赤坂喰違内に住めり。歌と能
とを好みて自からするよりも人を評するが得意なり。されど

九郎實共に
當時能の名
人なり

よきはよしとはめ。あしきはあしとあざけりて。誰の前をもは
からず。何がし伯は喜多流の能をせらるゝが。ある席にて此翁に
あはれしとき。御身は能のわる口をよくいふと聞く。一番自身で
やつて見せぬかといはれしに。それは御覽にも入れ候ふべし。但
し公は相撲の勝負を何かとの給ひて。大鳴戸のまけたるは不覺
なりなど評し給ふが。相撲とる御力はいかほどかおはすらんと
いふ。いやかれは相撲とりにて我は左にあらせ。くらぶべしやと
いはるゝを。さ候へばこそ我も九郎や實の藝を評するには候ふ
といへば。一言の答もなかりしとぞ。

苦が嶋

むかし阿波侯のかゝへに苦が嶋といふ相撲あり。いづくにてか
寒中に興行ありし頃。弟子來りて今日は得とり候ふまじといふ。

なに故ぞと問へば。今日氷の上にすべりて髓をすりむき候ひつれば。と答ふ。苦がしま曰く。とらぬはよし。すべりたるは不覺なり。相撲の土俵にのぼりて尤も重んずべきは腰のすわりからずや。土俵の外なりとて其腰をゆるめんほどのものが相撲の上手になるべきいはれなしと。叱りけるといふ。此はなしは万事にわたるべし。

紫陽花

夕ぐれに歸りて見れば。紫陽花を瓶にさしたるが机のかたへにあり。花は房ごと三つ五つ開けて。此頃の蝶の羽のやうに筋まで青白くあざやかなり。豆の如き荅は花のめぐりに多くつきてほころびそめたるは。藍の葉を見せたり。我故さとの庭にありしが五月雨にぬれたるさまも思ひ出でらる。今は瓜畑にやなりぬ

らん。

ほろがや

ほろがやの中には。かいまさうちかけて乳兒をねせたり。さしのばしたる手の白くふとりたるもかはゆし。ときくくにうちうごく唇は薔薇のつぼみに似て。なほ乳をたづぬるさまぞしたる。いかなる夢をか見るらん。夢足りなばさめよ。風は風車と枕べにぞあそぶ。

火影

ぬれたる紙に畫がきしやうなる月中空にあり。川瀬は雷の聲してさかまきみだるゝさま。梅雨の名残ものすこし。橋ゆく車の火影よひよりまれなるに。ほどゝぎす聞く田舎ならましかば。

九郎の言

おのれ鉢の木の能をしける時にやありけん。樂屋にて稽古に苦しみつるよしを實生九郎に語りしに。九郎曰く。見る人の夢にも知らぬ苦勞の太夫にはあるものなり。それよく出來たりとて見る人は當然のわざと思ひてほめもせず。たま〜出來そこなひたるをば笑ふこそ心得ねど。何事も難なきをもて上々の出來とすべし。

謠の評

小原御幸のうたひに。新中納言知盛は沖なる舟の碇をとりわけ甲とやらんにいたゞきとある詞を評して。甲よりも碇をよく知りたるさまなるは。門院は漁夫の流にやといへり。評者の言おほ

むねかくの如し。

來客

用事なくてみだりに人の來るはうるさきものなり。何かいひたき事あらば前に端書にてもよこしておけかし。朝でがけ。夕飯にとりかゝる頃。ものかく半すべていつにても不意に來てひまつぶさすることにするさし。手紙にてもすむ事をわざ〜來ずもあれかしとぞ思ふ。これハ人も同じ事ならんとおもひしに。人はうるさき事を好むにや。用なしとて訪はねば恨む。手紙していひやれば怒る。世の交際はかたいな。

官吏

長官の好むところは屬官よりひいて小使門番にまで及ぶ。基な

り謠なり。盆栽なり。長官のかはる毎に昨日はきらひなりしものも今日は好きにならざるべからず。多忙にて多能なるべきは官吏の境界なり。

室の梅

梅雨もまだ晴れぬに。花賣は桔梗など秋のものども荷ひきたる。瓶にさして見るよ。日數もたゞで。葉のしぼまねど枯花のやうに色も香もなくなりぬ。いまだ咲くべき時ならねばなるべし。此頃歌習ふ生徒の室の梅といふ雑誌をもて來たるを見れば。何がし學校の女生徒どもの歌や文やと集めたるものあり。うのよしあしいかにと問ふ。答へて曰く。まづ題によりて大かたを判ずべし。花はその時節々々のあるものを。雪中にさくらを咲かせ梅の頃に杜若みんとするの。俗人をこころよるこばすべけれ。まことの雅

人をよろこばせん事はいまだあり。美術といひ文學といひ。この自然をはなれてとるべきものあるべしや。されど世には時ならぬ花好むやからのみこころおほけれ。

すつぼん

書生三人うちつれて早稲田の田道をゆきしに。いと大きな籠を見つけたり。泥まみれになりつゝやうくおひまはしとらへしかば。繩もてしばりもちゆくを見て。あたりに荷をおろしゐたる商人の。それを三圓に賣りて下されといふ。はじめは下宿屋にてうち集まり食はんと思ひしに。三圓といふ聲をきゝて。さらば四圓にてもといふ慾心や起りけん。賣らんといひ賣らじといひ。三人の間にあらそひ決せず。かたへの人また之を見て。あたらあのですつぼんは市にもちゆかば。やすくとも六圓にはあるべき

にといふ。いよゝゝ慾心つのもりてつひに賣らざりしが。たづさへかへりて人にかたれば。二圓にも買はんといふもの更になし。賣らざりしをくやめどかへらず。つひに腹中に葬られてやみにけり。

千人をざり

田舎にては。早うちつゝく時。雨乞といふ事す。千人をざりとして其人数を川原などに集め。念佛を唱へてをざりつゝ祈禱するがわが里の習あり。或人曰く。神に雨を祈るに其きらひ給ふ念佛をもてするはいかゞと難せしに。また或人の曰く。さればこそ早くやめさせんとて降らせ給ふべけれど。

都の家づとの序

明治十六年の秋と覺ゆ。越後の川上君より歌の直しの事をたのみおこされたれば。諾しくれよと。交詢社の役員よりいひ來れり。これを君と我との交際の始とす。されど文の上ならでは親しくものいひかはす事もなく。歌の外にはうちとけて相見ざるをいひざりしに。此春はじめて膝をまじへて盃とりかひせつるこそうれしけれ。一夕の快談なほ九年のおどづれには遙にまされり。あはれ其時のおもかけを目の前に再びるがきいだすものは何ぞ。たゞこの都の家づとこそあれ。

旅情

窓を開けば雲の軒より散り初めて。前の山路を草薙わらはのぼるも見ゆ。昨日は峰の社にまうで。古文書などあさりたり。今日は近きわたりの瀧みてこん。山かけは夏みじかければ秋の花

ところづくにさきたり。道のつくる處に苦むせる橋ありて。そこより見あぐれば唯ましろにぞおちきたる。自然のこゑは人間の音楽にまさりて。心のけがれものこらぬ心地す。人毎に歌おもひ書にうつしなすべし。木の皮はぎて發句しるせるあともあり。流にそひて思はぬ木かげに時鳥をさゝなごしつゝかへり來ぬれば。日はなほ高し。北隣は碁をうつ客にや。石のひき勝ちぬ負けぬの聲ひまもなく聞ゆ。南の部屋はわが友にや。時々墨する音のするのみ。いと静なり。かゝる旅寐は今も夢にぞゆきかふ。今年は山にかさだめん海にかさだめん。

逐天狗文

ある神社の造營に用ふるとて。杉の大木をそのね山より伐り出ださんとす。此木は昔より天狗のすみかあればとて。大工ども手

を下さんといふものなし。神主は本よみなりしが。韓退之をや學びけん。善宰相をや習ひけん。逐天狗文といふものつくりて。木の下に坐をしめ。わが社の神木を天狗の領じて住む事以ての外の事なり。速に立ち去るべきよしをいとかしこげに讀みをはりて。斧もて下枝を二つ三つはらひたるにぞ。さらばとて皆々惑ひをときしとみづからはこりて人に語るを。或人評して。その神主の顔こそ天狗に似たり。けれどて笑ふ。ほこるにもさまぐあり。そしるにもさまぐあり。

名文名所

名文によりてさほどなきところの名所となる事あり。名所によりてさほどなき文のもてはやさるゝ事あり。先年安房の天津にありて。頻に清澄山にのぼりたくなりぬる。『鶉飼』の詞を何と

ちく思ひ出でたればぞかし。

京都にゆく毎に清水にまうづるは更なり。地藏堂經書堂鳥部山のたぐひも『熊野』あればこそ心とゞめらるれ。大坂天王寺の塔にのぼりてもまつ『弱法師』の文句を誦せらるゝ。高野にて三鉢松ときけば『高野物狂』を口ずさみ。奈良より木津にいでゝは『百萬』の『かへり三笠山』をおもひ出づるに。すべてたがはず。『龍田』『當摩』などいふ謠はわきて心ひかるゝものとも思はざりしに。足るの地を踏みて後にはかに興味を感せしも奇あり。よりて我旅の具には謠本をいつも携ふ。わが經し旅のおもかげは謠本の上を今日もはなれず。

樂人の子

隣家に樂人住めり。その子どもはかりそめにも庭の若竹きりと

りては笛つくりあそぶ。おのれは常に子どもを能見物につれゆけば。杖をもちては長刀とし。羽織ひきかぶりては獅子のまねなりとて客に笑はるゝをもかまはず。三遷のをしへも思はれていとおそろし。

七夕祭

今年は七夕祭せんといへば家こぞりて其事にぞ集まる。まづ色がみをきりて短丹色紙とし。机を中にとりかこみて手にくゝ歌書くりひろげつゝ書く。子どもは今年六つなるが鉛筆もて下書してやれば墨くろくゝと『こよひあふせを』などぬりあぐるもをか。竹は近となりよりもらひきて。それを軒ちかく左右に立てゝ赤く青くゆひつくれば。あれよくと子守の肩なるちこまでよろこぶ。横にも竹をわたして衣をかけ。前には机をすゑて五色

の糸。茄子すもゝなどを備へ又琴をおく。思ひ出でたりおのが十三の年なりけり。

よもすがら星のたむけにひく琴の

音をふきあげよ四方の秋風

とよみつる事を。これも黄なる紙にしるしてゆひそへたり。

長短論

短くて意をつくすによしなしとて長歌論者は短歌よみをそしる。長くてくだくしきに過ぐとて短歌論者は長歌よみをそしる。いづれも非なり。栗の花もさゝげの花もとりくゝなるものを。されど西洋のは精しきに失するうれひあり。東洋のはあらしにながるゝおそれありとは。われもおもふ。

俗僧

俗僧あり。維新のはじめ廢寺になるべしなどいふさわざに。髪たてゝ商にならんとす。それには資本いる事なれば。寺領の山をきり拂ひてまづ賣りけるを。檀家のものども聞きつけいたく怒りて。僧になじれば。さればに候ふ。世は末よ及びて僧も還俗するは。いかにもあさましき次第なれば。せめて身がはりに山なりとも坊主にしておかん。とぞ答へし。

今夜の市

夕日すゞしくなれる道を百合女郎花など車にのせてゆくは。今夜の市にいそぐならん。まづ價よく賣られて。やんごとなき前栽に光を放つもあるべし。寵おとろへてかれくゝながら籬のもとに投げやらるゝ行末もあるべし。あるは夜ふけ人さりゆく燈火

のかけに獨り残りて。世をうらめしげなるも。または低き直にね
ぎられたるはては。一夜の寵をも全うせぬなど。さましくなるべ
し。おのれ花ならば。いづれも願はじ。

思ふ人

簾を半まきて。帷子の袖いとすしげに。欄干にもたれたる少女
あり。池の蓮の水にうつるを。ながめがほなるは。心に思ふ人やあ
るらん。思はるゝ人やあるらん。夕やけの雲もこひし。そらとぶ鳥
もこひし。草葉の露。水の流。こひしからぬものなし。されど未來は
天もいまだこたへず。

猿の人まね

一日市より猿の本よみかけ。てあくびしたるさまにつくれる置

物をもとめかへる。子どもら見てみなわらふを。さなわらひそ。猿
の人まねに本よむこゝろはよみすべし。人の猿まねにあくびせ
んはいましむべしといへば。いよくわらふ。

車上にて

暑さををかけてゆく道に。すだれわたらしうかけていと涼しげ
なる家あり。庭まで見とほされて。蘭の鉢などもあらはなり。ある
じの女なるべし。子供に三味線をしふると。て向ひ坐せり。子もよ
く教へをまもりて。他事なきさまなり。わが上にては。さも思ふま
じけれど。よそめにはいとゆかし。

川のすしきかな。たには男の童あまた集まりて。およぎ習ふも
あれば。袂だすきして。魚など。とるやうに。小石もて水をせきとめ
つゝ。心のまゝに遊ぶ。あはれ。汝が遊び時は。今ぞく。水はせくべ

し月日はせくべからず。たのしく遊べわこたちよ。
柳の陰を一日の命とたのみて屋臺店かきすうるあり。餅すし水
水など道ゆく商人車夫などのいこふをまちつけて賣る。肩の風
呂敷包うちおろして汗ぬぐふもあれば。柄杓より水一のみにの
みてほと息するもあり。およそ世をくるしくわたるものも此店
に集まれば。又あたひやすくて天下の美味をあぢはゝるゝも此
うちにぞあるべき。

新聞縦覽處と札うちたる店には。大机をすゑたるまんなかに夏
菊百合など客まぢがほなり。新聞雑誌のうづ高きをひきぬき。う
ちかへしてはよむ書生あり。今日は日曜なれば。學海のはるけさ
をも忘れて半日世の中の波に遊ばんとてや來にけん。世の中の
波はいと危し。書生の境界こそうらやましきに。
吳服屋を見れば盆前のいそぎとて出で入る人々おしわくるは

どなり。奉公人半年の汗を一日のやどおりに洗はせんとする主
人の用意もあるべく。主家のいとま出でなば最愛のむすめを連
れて閻魔まうでをし。歸さには芝居の立見もして來んなど思ふ
母おやの望みもあるべし。はこび出す浴衣地は山もくづるゝか
と思へば。忽にをさまりて赤き黄なるきれども川とぞ流れいづ
る。身をおほふにもいそがしき世なりけり。

動物園

小兒に上野の動物園見せんとて今日はゆくなり。梢に猿のざれ
遊ぶさま。鶴の水に首さしのばすさまなど。まづ心にかなへりと
見ゆ。象の鼻まきあぐるをもはじめて見る事なれば。おもしろが
りて去らんともせず。これぞ百万の軍勢を踏みころさんものと
はなどかは知らん。象もかゝる先祖のありとは知らでやあらん。

虎の赤き口うちひらき。仰ぎ伏すを見ては。清正の畫に似たりとて喜び。熊のぬむりたるを見ては。おそろしきものとも知らず。あなをかしと笑ふ。虎よ。深谷の月に一聲はえけん昔の勇氣の今ありやなしや。熊よ。窟の雪吹にうそぶきいでつる北國のそらは今日の夢路にもゆきかふやいなや。暑氣は地にとほりて森も聲なし。虎熊のみにもあらじ。

あげさする力

書生どもあつまりて。此石をあげて見せん。いなわたしなどあらそひぬたるを。塾長いで。何このくらぬの石をといふ。書生いかに。どわやぶむ。さらばまづ君あげて見給へといはれて。書生の一人が。やと聲いだしてさしあげたり。いで先生もといひければ。人をしてあげさする力を既に見せたるならずやとてうち笑

ふ。書生かへさん詞なし。

盆の十六日

盆の十六日は奉公人のいとま得たる日とて。閻魔ある寺はいふまでもなく。芝居公園の氷店飲食店などにぎひたとへんにもなし。あたらしき二子の單衣に。癩の葉の阿波縮に。男女うちませてゆくもありかへるもあり。生きながら一日の極樂に遊ぶと。いはいはまし。かゝる樂しき境界はわれらまだ知らず。

天か人か

千丈の斷岸を心のまゝにおりのぼる獅子も。檻に籠められては猫にもしかす。萬里の虚空をわがものがほにうたひ遊ぶ雲雀も。籠にとらはれては雀にもおとれり。英雄の末路歌人の漂泊。あゝ

天か人か。

小人の争ひ

車夫道のかどをまがるとて向ふよりくる車よつきあたらんとす。われも馬鹿野郎どの、しればかれも馬鹿野郎どの、しる。非は半かれにあれば半は我にもあり。小人のあらしひかくの如し。外交のさまにもかゝるたぐひやあらん。

藤豆

藤豆は秋の霜にかゝりて風味のまさるのみならず。花いと愛すべし。白くも紫にも初秋風にうちなびける。名たかき夕顔の上にあり。おのれ備後の福山より鞆津に遊ばんとして道々の田舎家にながめたるは。十五年の昔ながらなほおぼえたり。安房の旅

寐の枕を隣よりうちのぞきたるは。九たびの霜をかさねし前にあり。されば移る家ごとに種を植ゑて愛するを例とせり。今年も苗よくと賣りあるく聲よびとめてこゝかしこに植ゑつるは。春雨の頃なりき。待てどもく垣にはのぼらで。たゞまつすぐに七八寸ぞのびたる。葉を見ればいとあやし。うべなるかな。花さき實なるを見ればさゝげなりけり。

蓮の露

そらには白く雲の峯をつくりてひろがりゆく。くびうちたれたる草葉こそあはれなれ。笠をかげにて青田に立ちくらす賤の女こそあはれなれ。過去の苦は未來の樂なるべし。蓮の露に月もやどりぬ。

なからましかば

大和めぐりせし時なからましかばと覚えしもの三つあり。宇治にやどれるに暮色なかば流るゝ水の上を三絃の聲のせたる舟の過ぎたる。これ一つ。興福寺にやありけん。佛さびたる御堂の軒に小學生徒の鉛筆畫をかけ連ねたる。これ二つ。古佛像をがみめぐる寺毎に。當寺の縁起をば忘れし如く外國人の賞美せし事のみいひたつる。これ三つ。

山と雲

碓氷峠を明日こえんとて麓の坂本驛にやどりしに。雨の日なりしかば雲の目前に飛び散るを見て。あはれ此山と雲とを東京にもちゆかましかばと人のいひし。さもればえぬべし。かゝる處に住む人は東京の町と瓦斯燈とをこの村にと望むなるべし。森を

うつす専門の畫師の市に住めどぞいふ。なるれば感情のにぶくなるにや。

拂子貝

江の島土産などにする拂子貝といふものあり。海綿のやうなるものより白き髻の如きものむらがりいで。この髻を根のやうに土中に埋めて生活するといふに。先年伊太利の博覽會に此貝の上下を轉倒し。かの髻を上にもむけて岩につけ陳列せしは抱腹なりしと見て來し人よりの又ぎゝなり。我にも横文字新聞さかさまによむ人のある世なれば。笑はれもせず。

望高き鼠

望高き鼠ありて常に思ふやう。空ゆく月はど心たのしく世を渡

らるゝものはあらじとて。ある夜其養子にならんことを乞ひたるに。月はいはく。いかにも自由なる生涯なれど。雲こそ我意にまかせがたけれ。されば我よりは雲の方權威あるべしと。よりて雲にはかれはいはく。我を使役するものは風こそあれど。また行きて風にはかる。風のいはく。雲をも月をも我心にまかすれど。我吹きまはる道に。板塀土塀など立ちふさがりて妨ぐればせんかたあしと。つひに塀にはかる。塀のいはく。我を傷つけて制しがたきものは鼠のみと。さらばなほ鼠のかたこそ強けれと。つぶやきてやみぬ。

宅教授

人に物教ふるころ。楽しきものなれ。今日は講譯の定日ぞと思へば。朝より心も勇みてかくいは。早わかりやせん。此順序にせば

迷ひも晴れんなぞ思ひつゝ。机にむかひてまつ程に。ひとり來り二人來り。つひに其數もそろひぬ。玉なす汗をぬぐひもあへず。本包みを開くもあり。まづ健康の顔みあはす。何よりの愉快なり。其日の學課はてゝ。學問を世の見聞に應用せしめつゝ。それ〴〵の物語うち聞くも。楽しみ深し。去りつくして後なごりいとさびしければ。歌や文やと机にうづたかきを片はしづゝ。直しもてゆくに。永き日の暑さも忘れつべし。明け暮れ水やり育てつる草の蒼を見そめし心地するもあり。時々は虫ばみねぢれなぞせるもあれど。猶望なきにあらず。これも終りて書うち開き新聞に向ひなぞしても。教ふる材料や例やと見つけずして止むことなし。あはれ別れ歸りし人は。今宵文をや寫すらん。枕草紙をやくりかへすらん。思ひやるさへ更に樂し。

蓮のれと

蓮の開くる音さゝに人もゆくといへば我もゆく。夜中に家をいで、明方上野につきぬるに。池をとりまきて老若男女いとにぎはし。人毎に半とけたる荅をまもりてうちつぶやくのみ。音さゝたりといふものなし。昔ある詩人の水鶏きかせんとて客を會したるに。その夜あやにく鳴かざりしかば。従者を庭の木かげにかくして木魚たゝかせたりといふ事思ひいでられて。あはれ廣葉の間にひそみ居て水鉄炮放たん童もがななと笑ふも。せめて來しかひあらせんとてなり。入谷の朝がほなと見あるきて。朝飯せんと根岸の笹の雪にゆきたるに。人既に満ちたりとて門打ちとざして呼べども答へず。あはれ物事にくひちがふあしたかなといふを。花のにはひ露の光のみよそにや聞くらんげにも不定のみこそたがはざりけれ。

烏瓜の花

蚊遣火たかんとて女どもの折り來つる柴の中に青くすゞしきかづらのまじれるは烏瓜といふ草なり。花は白き糸もて作れる網などのやうに咲きはこりたれば。机の水瓶にさしたり。手にとるなどのみいふべきにもあらず。

何がし伯の序

二三年前までは著述にても翻譯にても何がし伯の序。何がし博士の校閲など、新聞に廣告して其光にて賣り弘めたり。この頃は序や校閲ありてはかへりて其書の價なきを證するなりとて。本屋はさらふに至れりといふ。買ふ人まどひてのちにさどる。

おほやけの虚言

おほやけの虚言を人もゆるしみづからもゆるすもの三つあり。紺屋のあさつて。三大節に禮服もたぬ官吏の病氣。學者の留守。

しけ

鰯買はうといふもあれば。鯛はいくらにまけんと叫ぶもあり。うち積まれたる鰯鯖は忽にかげをかくし。こゝにもかしこにも松魚すゝきは山をなして。鱈に切らるゝ行末もしらずがほなり。聲うちからして賣り買ふ人々。どほくて聞けばいさかひやすらんどぞ思はるゝ。日本橋を朝とほればいつも此さまにて。夏冬かはる事なし。玄かるにわが住む山手の方にはしけと稱へて魚のすがたも見せぬ時多し。されば東京すべてかと思へば。玉樓金殿などにはしけなしと聞くぞ不思議なるも。とより天氣あしくて魚

のとれぬ時なきにあらじ。とれぬ魚をもつりあぐる力こそ恐ろしけれ。

日まはり

日まはりといふ草の一寸にも足らぬを。小兒はよそよりもらひ来て手づから庭に植ゑたり。夏も暮れて秋風たつ頃になれば。たけ高く小兒の二倍にも至りぬ。わ子よ汝が智はこれに似て父にまさるやいかに。

江の島鎌倉

花につけ月につけて先づ心の浮れいづるは江の島鎌倉のそらなり。されば一年としてあそばぬことこそなけれ。片瀬村うちすぎて小坂ひとつ越ゆれば。江の嶋まへにあり。には

かに目の開けたるこゝちして愉快かぎりなし。春は薄衣ひきわたせるやうなる波のうへに。白き點つけて水鳥の逍遙するはいどのどかなり。浮べる舟の遠きはやうく消えゆくも畫のごとし。右は大磯小田原より箱根のあたりもみゆるに。富士は薄墨に面影のこしてぞ向はる。左は三浦三崎より安房の遠山にやあらん。雲霧の間に横たわれり。お山にのぼれば沖つ宮ことに神さびて梅のさかりにあへるもうれし。岩屋にゆくとしてぬれたる岩の苔ふみあるくに。これといふこともなけれど見るもの聞くものすべて樂し。

まして夏のすゞしさは松風のみにも非ず。よせてはかへる潮にも我身を共にとぞ思ふ。ある年の八月十五夜この嶋にやどりて月見せしこともありき。たちまちに高潮のさし來てあゆみ來し路も絶ぬ。鳥居の石すゑにあがりて鎌倉山にさしのぼる影を

ながめしは。五六年やへだつらん。

鎌倉は長谷もよし。乳兒うちつれて行きつる時。老尼の佛の御供とてくだものくれたること。いつもれもひいで、は笑ふ。椿のものとにたゝすみて。稻村崎みやるなど興ふかし。鶴岡こそいづこはあれど。ことに鎌倉めきたれ。いてふの梢のまづ目につくは。昔語のしるべなるべし。葉もなくて立てるもすこし。黄ばめる頃の風の音も淋し。月あはれにかすめる夕暮。紅梅の落花にうたれ歩きしも。思ひ出づれば四年になりぬ。

鎌倉の宮の櫻色づく頃は。いづこの畑づらも黄なる雲におほはれて。天までにはふ心地す。頼朝卿の墓いとあはれなり。常盤木花の木ちと木立ふるめきて。いかめしかりし其代の名残も見ぬ。春雨のそぼふる日。よ詣でしぞ。わきて心も消ゆるやうなりし。今年の一月もさまよひめぐりしが。名も知らぬ古塚の陰に枯れ

立てる薄の嵐にむせぶなど。古跡の感情を引く事多く。何ならぬ古寺にもあはれを催さるゝ土地なりかし。されば古寺拜まんとて人も行くなり。潮あぶるついでにとて人も行くなり。入相の鐘まばらに聞こえてかすみ渡る松原に。歌思ふ人我外にありやしや。

酒飲の親子

酒のみの親子あり。親酔ひて歸れば子も酔ひて歸る。ある日親は子に向ひ。汝の顔は七つにも八つにも見ゆるが。かゝる怪物息子に我家は譲られずと戯るれば。子は答へ云ふ。こんなにくるゝ廻る家は。それがしもほしからずと。

今は昔

七夕祭するやうは。よそは知らず。幼なかりし日のわが家にては。二本の竹に短冊つけて坐敷の椽にたて。五色の絹糸をかけたる竹をまた横にわたせり。前に机をおき毛氈しきて。供物には西瓜白瓜茄子などおく。大きな鉢に清き水を入れてそなふるは。星合の影うつさんためとぞ聞きし。夜に入れば七つの燈を庭上にたむけたるが。すゞしくなびきあひて。更けゆく空おもしろし。手習にゆく子供らは。川瀬にゆきて机硯など洗ひくる習と聞きつれど。我師の家にてはする事なかりき。あくれば短冊つけたる笹を海邊にもちいで。手にくゞ流しすつるが波のまにくゞたゞよひゆく。なごりをしさは星のみにも限らじと見ゆ。盆こそあわれなれ。北おもての廊にかりそめなる精霊棚を設けて。栗の枝と篠竹とをもて垣ゆひめぐらし。芭蕉の廣葉を敷き。三界万靈といふ位牌をおきて供物などす。家の佛たちはなほ持佛

堂にぞおはする。飯汁をはじめすべて蓮の葉にもり。また茄子にて作れる馬をおく。之にのりておはせとなるべし。餅にて笠の形をいくつも作りてそなふる。雨ふらば之をめしてとにやあらん。十三日の迎へ火。十四日は馳走火。十五日は送り火とて暮れはつれば麻のからを薪として庭火をたく。かくて茄子をさいの目にきりたる上にみそはぎの枝にて水をそゝぎ。一同に拜をするは。神を祭る式めきたり。晝は市中近在の少女子どもつくりたてゝ幾群にもなりて踊をどらんとて来るを家ごとと呼び入れて。佛の回向にかふるも空也念佛のおもかげにやとをかし。赤き青き紙にてつくれる切籠とらうといふものに。桔梗女郎花などをへてゆきちがふは。初盆の家にもものするなるべし。たれもく家の墓より親類友だちの墓などまうであるく。さはいへど暮れぬ間にはぎはしくてまぎれぬ。またはじめとをはりの夜は。墓と

とにどうろう燈す習ひなるが寺はいづれも山ぞひにて。南には泰平寺法圓寺妙典寺大超寺光國寺。東には金剛山龍華山西江寺。選佛寺などゝ。わが家よりまぢかくながめやらるれば。うつくしき光たどへんにもものなき見ものなるが。ふくるまゝにやうく消えゆきて。三つ四つ五つのこりたるも。つひにしめりはてたるいとかなし。踊のなごりにや。太鼓の音はるかに聞えて。月ぞさむきまで閨にもさしいる。あられ盆までも昔こそ戀しけれ。

舶來物

外國より渡れるものにてなつかしきは。いちご。せうび。かなりや。がらすの器。本は英吉利風のかりとちにて。紙の折目を切りつゝ讀む。いとたのし。

東髪

一時東髪といふ髪はやりぬ西洋婦人のすればとてなり。されどかれは帽子きるためなるを帽子もきぬわが婦人のまねすべき事は。又髪のかざり其外にも海老色を用ふるがおこなはるゝは、これもかの婦人は髪あかければ似よりの色なるをわが婦人の髪は黒ければ、とりあはせいやしげなるぞかし。知るべし西洋のまねは大かたかゝる類なるを。

あすの旅

あす旅立たんとする夜は心はや空なり。はじめの山ふみは、まだ見ぬ人のなつかしさに逢はんとするが如く。かさねての浦めぐりは、へだてぬ友を年経て訪ふにもたとふべし。川あり橋りてそのむかひに。古寺の木の間より半ば影を見せたるさまはい

づこかのわが見し景色にや似たらん。地圖にすれば何がしの社もほど近し。名たかき處なれば序にまうでんなど。想像と望どかはるゝ。燈火のもとにぞ集る。矢立に墨すり入れつゝ。名所圖繪やうのものくりかへし見るほかに。わづかの日數あれば家にいひれく用もなし。いざや寐ん。妻よ若し目がさめたらば早く起してくれよ。

重代の寶

西洋にての家傳はる重代の聖書といふありて。古きほど尊はるゝ風ありと聞く。いとおもしろし。わが國も昔は太刀をもて寶とする事これにもすぎたれど。其時代は去りぬ。このゝち何ものか之に代るらん。

まことの友

酒のませとてくる人はまことの友なり。ともに飲みて快談すべし。月花に託して訪ふ人は心の底いかにあらん。よきほそにあしらひてかへすべし。

かたわれ月

夕ぐれがた家にかへりて湯あみするこそうれしけれ。今年は残暑つよしとはいへど。秋たちて三日四日になりぬるまゝしにや穂にいでぬ薄もうちなびき。ちい〜と虫のきこゆるやうなるもすいし。風のふと入り来て燈火うばひゆくさへにくからぬにかたわれ月の朧をおぼるに照らしたるなど。

ひけそり

鬚そりに行きて。小僧にそらせぬたるが半よりおやかた代りて剃刀を執れり。何ほどもなき事ながら其手ざはりのこゝちよさ比較せんやうもなし。生徒の教授をわづかる身にして。いそがはしきため高弟なほに代稽古さする習あり。同じ書物を同じやうに講ずる事ながら。聞きとる方にはいたく損得ある事。かの剃刀のたぐひならざるべし。又思ふに學校にもあれ自家にもあれ。教師の學識をしたひて入學をしたるに。來て見れば代稽古なるが多きに失望して。はてはかへりて名もなき先生の自ら教授の勞を執りくるゝには若かじといふに至れり。これも常に床屋にゆくに。大店はあまた見習の小僧をつかひ居れば。主人の自ら剃刀とる小店におとれるを感じたるたぐひなるべし。

望月

竹の葉末にのぼれるを見れば望月なり。大陰曆の七月あるべし。この月に對して例の過ぎにし方こそしのばるれ。まづ故郷にては宍戸の伯父君の山莊に歌の會ありし時。月入簾といふをよめりしも今宵なりき。稻葉の中道を笛ふさかはして田舎の祭にゆきたるも今宵の朝なりき。友は毛山正廉三輪田直三郎渡部永三郎西村守幸なりしとぞおぼゆる。三輪田は蓮臺の上にて月見すらんとあわれみかし。

墨田川に舟うかべたるに曇りはてたれば初秋無月を見るも一興なりと戯むれたる友は世を隔てざれども今は何くにあるらん。

大磯にて見しこそ忘れぬ。疊のやうなる海の末に何となくさしいでたるが磯の波はこゝかしこひかりあひてやうく海白く嶋黒くぞなりゆきつる。

家の人々集めて題をわかち歌よみたるは去年なりき。毛山正辰小穴いち子鈴木まる子の三人たらぬぞ今年はさびしき。松が枝長く坐にはひ入りて横たはりしこそ。昔になれば月妨げしも忘られてこひしけれ。

隣の娘

心やすき家のとなり美しき娘あり。あれならば人に世話してもなほいひゐたる頃しも。夏の事にてあけひるげたるに見入れば。何か火鉢にて物を焼きながら立膝してつまみくひぬけるにぞ興さめて顔さへ貌さへ見にくくなりぬとぞ。

田舎みやげ

雲かさなりてむきあつきに。隣の下婢田舎のやどにゆきたるが

歸りしとて萩の咲きそめたると女郎花のさかりなるとおこせたり。花いけにさしてむかひ坐するこゝちよさ。おくりし人も想像の外なるべし。

雇教師

今は昔わが學校の雇教師に西洋婦人ありけるが約束の期限すぎて國に歸るに人々おくりものせんとす。おのれはかねてより此婦人の權威をほしいまゝにしてわが國風を失はする教育法をにくしと思ひぬれば別をしとは更に思はず。又まじはりもなければ物おくる人に加はらん心もなし。たゞそれが居すなりなんよろこびにとならば同意せんといへば例のと人々にがむ。

住むは都

住むにの都旅するには田舎と我は思ふなり。此頃ある人の記を讀むに東京を憎む念いよくまさるを。かゝる山中にて團十郎菊五郎の芝居さへ常に見らるゝものならばなぞいへるは。まだ二三日にて珍しければにやあらん。さりとは人の心々なるにやあらん。

鬼子母神

梢をおほふ蟬の聲は村雨めきていとすいし。むれぬる鳩の軒にあがり石燈籠にやすむもたのしげなり。風よく御堂に吹きとほして僧の眠りもさめつべく。餅賣る店は人しづかにて釜の煙はそくくゆれり。あはれ鬼子母神の森よ。訪ひし昨日の春なりしを。土筆つむ人のゆくへもしらぬまに

野べの草葉のいろぞ秋なる。

童子の詩

ある田舎にて發行せし新聞に十二歳なる童子の詩をいたくほめて度々載せければ何とてかくはと問ひたるにそれが父の金もちなれば補助をたのまん秘訣なりとぞ記者は答へし生前の名は得るにもやすく失ふにもやすし。

わる口

わが故郷に中野二一といふ老人あり畑物作る事を好みて熟練なる中にも茄子は最もその得意なりしといふ此人身のたけ極めてひくき方なりしが或る時例の畑にいで手拭を茄子の枝にかけ置き其根よこやしをしてゐたるにさゝめ忽にて見る見る茄子の木の生長する事おびたしくかの枝なる手拭も手の

どっかぬに至りぬとて人あざけるわる口もこれ位にしておきたし。

なほ些事

西洋人がほむるからとて日本畫のおこりしは西洋人がそしるからとて謠のすたりしに異ならずこれらはなほ些事なり。

秋になりぬ

山里のけしき秋になりぬ玉蜀黍の廣がりたてるかなたには鳴子の繩も引きつゝけたり藤豆の花しろく芋の葉の露うつくし朝まだ早ければ風はそよともいはず。

八犬傳

我八犬傳を始めて讀みたるは十四の年なりしが其頃は堀江の叔母上の若かりし時みづから寫し給へる初編二編と。同じ家にありける三編四編の板本との外には得べきやうもなし。これも秘藏したまへればしづかりて墨付けなどしてはと母上の制し給ふにより。年に一度もむつかしき程なりき。母上の讀給ひしは笹屋と云ふ貸本屋のと聞けば。五編よりあとの見なき心のおさへがたくてうれを尋ねさせたれど。今は其家絶えて影もなしと云へり。鎌原と云ふ家に藏せりと聞き出だして。いろいろとたよりもとめてこひたれど。これも借られずして止みぬ。やうく此本もてる貸本屋を見出だして全く讀みをへたるは十六の年の秋かどおぼゆる。日に十冊づゝを二度もくり返したれば。一日數厘の見料も。こんな人に借られては迷惑ならんと母君笑ひ給へり。ために夜をあかしたる事さへありき。其後廣島にて

醫者にむつかしき讀書を禁せられし病中にも此書を得てこそ慰みしか。それも我物にて自由に讀まるゝ今日になりてはさほどにも思はず。虫ぼしするとして本箱より出でたるを。女子どもの奪ひあふのみ。されどなほ主人をば忘れざるべし。

とき子の碑

心つくしてそだてつる女郎花は苔見せたる程こそあれ。一夜の嵐に奪はれてふたゝび歸らば。あはれ西山とき子を如何にせん。とき子父母に仕へて孝に。最も學問唱歌を好み。ひまには庭を愛して手づから小さき築山など作り。花を植ゑ水を引きつゝ。樂しめり。神を信じて病中常に口に祈禱を絶やさず。慈善心に富みて貧民など見る時の如何にもして其友にならばやどぞいひし。神と親との愛さこそと思ひれてあはれなり。明治二十一年心藏病

にかゝり。八月九日の朝終に眠りぬ。年僅に十五。花いまだ開かず。秋風心なし。潮江山に葬る。とき子父母と一人の姉あり。父をば志澄君。母をばかほ子君といひ。姉はみちよ子君とて。今の明治女學校に在り。

萩寺

龜井戸の古寺に萩あり。世に萩寺と呼ぶ。夕日身にしみてこゝか。しこ咲き初めたり。雨の朝月の夜露に埋れて起き臥すはまして。如何ならん。家近からば月下の門をもたゝかましをと思へど。家近き人は盛なりとも知らじ。

箒の目

萩の散りたる庭に露おきたるこそ美しけれ。朝毎の例とて今朝

も出で、見れば。いつしか書生に掃き去られて箒の目あらたなり。わが友の詩に。山童不解詩人意。曉起門前掃落花と云ひたるも。かゝる時にやとをかじ。

わが文庫

わが文庫には沿革あり。はじめは家に傳はる漢籍のみなりしを。十三の年にやまづ詩語碎金。幼學詩韻を得たる。これみづから書を藏するはじめなりき。其次は白詩選がほしくて書肆に求めたれど得ざりしかば。其代りに聯珠詩格を買ひたり。其次は十五の春本居流の國學にこゝろざすとて。古訓古事記や玉銚百首やと。十數部の書を得て。こゝにやまづ目録の形をなしたり。これを基としておひくゝに集めつるが。甘ばかりの頃は本箱に七つ八つにもなりぬ。田舎のならひとてえたき本も得るにかたく。手づから

夜を日になして寫したるも多かりき。廣島に遊學せる頃、船便にて皆取り寄せ置きたるが、學費つき病苦にせまりて終に賣り盡したるを、今思へば遺憾やる方なし。たゞ今に残るは數部の寫し卷と古訓古事記のみ。東京に来てはふたゞび集めかけたるを、又も残らずなしつるは、猶窮鬼のしふねき業にこそありけれ。かくて今の藏書は明治十五六年頃よりのにて、やうく一文庫をなさんとす。命のまゝなる限りは秋の夕春の霽の散歩にもふるまゝにひろひ來つゝ棟にもどゝかせん樂しさよ。藏書よく、わが生涯はもはや汝とふたゞび別れじ。火をさけ水をさけて山の手に住むも、たゞ汝の愛ある爲めぞ、さるにても衣魚てふ敵こそにくけれ。

犬

朝どく小兒を遊ばし居たるに、いづこの犬にか庭さきに向ひ立てり。小兒はうち悦べば、煎餅など小兒の手して與へさするに、いとうれしげに食ひては、椽側に片足うちかくるも早馴れたり。はじめは小兒の手より受くるも、行儀よかりしに、はては手を甜め足を甜めなど、疊の上にも上らん。さまなれば、疎ましくなりぬ。人を使ふもこれに似たり。

讀書の時節

植ゑてよりこのかた、待ちに待たれし女郎花は、咲きそめたり。ゆら／＼とふるゝ程の朝風いと心地よし。霧の露を殘して晴れ行くに、薄緑なる羽をひらめかして、とんぼの飛びめぐるなど、すべて秋なり。讀書の好き時節にもなれるかな。

舟辨慶

ある人舟辨慶の能を田舎にて見たるに。太夫は長刀つかひの名
人なりしかば。舞臺にてまことの術をつかひたるがおもしろか
りしと語る。れのれ曰く。能の謠の文句にあはせて所作を付けた
る物なれば。さる事の出来べきやうなしとなじれば。そこが名人
の處ぞと云ふ。此等はいはゆる小兒を欺くべき言。

能見巧者

これもある人。一日能見に行きしに。謠本扣へたる見物が多かり
しかば。さては熱心深き人はちがうた物かな。本持たぬ人の心な
さよとみづからも恥かしかりしと歸りて語る。なんぞ知らん眞
の能見巧者はかへりて本持たぬ人の内にありしを。

文人畫

三味線ひく女を文人畫にかきたるをある畫師の許にて見たり。
妙はいづこにかと問へば。此俗なる題を枯れたる筆もて寫した
るにありと答ふ。文にも歌にも此心忘るべからず。

嘲弄家

嘲弄家の聞ゆる老人。一日歌の會の席にて是も負けぬ氣の若
者にむかひ。君は歌はじめてから年久しくなれるに。近頃はじめ
し人々にまくなるとはあまりならずや。古き程人は鈍くなる物か
など嘲るを。若人すかさず。然ればこそ御邊は我より下手にはな
り給へれ。遠き例にも及ばぬをといひ返されて。腹立てもならず。

逗子

肺を病む人あり。醫師にすゝめられて相模の逗子に行きたるが。空気が清く海水浴むは心地よけれど。同宿の男も女も病人ならぬはなければ。かへりて神経を刺撃せられて。悪しくなりぬと語りし。ことわざに云ふ。宿屋の蒲團きたなしとて誰も裏返して着れば。裏の方が今はよごれたる類なるべし。此ことわりを思はゞ。表を着るが猶よきにや。逗子にも病人へるべきにや。知るべからず。

追善の歌

落葉と云ふ題にて追善の歌よみてくれよと知らぬ人の乞ふ。止むを得ずはよみもすべし。されど道路の人の葬送るに似て何といひてよきやらん。情のうつしやうこそなけれ。歌も虚禮の道具とはなりにけり。

日本橋通

日本橋の通を行けば千百の商家軒を連ねたる中にも。我目に付くは本屋なり。御用の二字もて世を見くだすもあり。位官の肩書を看板に輝かして田舎人を待つもあり。甲博士の著書は乙學士の著書と店を異にしてにらみあふなど。政治家もよそならず。ひとり古本店に平和の春を見るのみ。

鎌なす月

西の空はたゞ燃え立つ紅の色なれば。森の木の葉枯木の様までけざやかに。濃き墨もて書きたらん如し。やうく黒くなり行く人の顔もそなたに向ふ方のみは猶光を返すに。黄金の鎌なす月は榎の枝にかゝりてぞ見出だされたる。

父のかたみ

父上の文庫なる陀羅尼落葉と云ふ謠本をだして見るに。手づから貼らせ給ひし紅唐紙は文字の上に其まゝあり。毎夜火ともしてから謠ふを例とし給ひしが。鼓の手なといふかしとてや此紙は貼り給ひけん。人に質してなとやおぼしけん。今はこれさへ御かたみの一つになりけり。

棚の詩經

棚の詩經をふと抜き出だして讀むに。何となく過ぎにし面影こそ思ひ出でらるれ。此書の素讀ならひにゆきたるの十一か十二の頃なりしが。我藩の學校にて明倫館といふに。冬は晝九つ夏は朝五つに我おくれじとかけつけ。到着の次第により早き者より

先にならひて先に歸るなり。試験は月の廿八日にあるを『復し日』といひ。年の十一月にあるを『こゝろみ』と云ひ。臨時に藩主の御前にて行はるゝを『おき』と云ふ。いづれも讀みたる本の中より適宜に抜きだして讀まざるゝが。其前になればふくしによるとて。友達互に宿を定めて夜なと集るを樂しきとす。間には徹夜するをりもありき。おのれは殊に詩經がすきにて。大方は誦讀し居たりしに。思へば一夢茫々としてすでに廿三四年を隔てたり。『茶菫を采り采る』と同音にとなへし友は。なほ机に向ひ居るや否や。『我心石にあらず』と教へし先生は。鬢すでに白かるべし。我持てるは後藤點の赤表紙本なりしが。よみかけたる所に竹の字つきを入れ。板にはさみ。三角の包みにさし込みかゝへ行く愉快を。今一度して見らるゝものならば。

あすの幼稚園

小兒の幼稚園にあすから行くとして寐ても寐られず。踊りくるひて樂しめり。今宵の夢には何をか見るらん。天人もいで、遊ばんずる月夜のさまなり。

寺の名

寺の名も大和山城はなつかし。橘寺秋篠寺當麻寺清水寺鞍馬寺の類。歌によまる、こそ多けれ。東京にては定まれる寺號にはあらねど。枳寺萩寺藤寺淺草寺など僅にみやびたりと云ふべし。

學者貧乏

學者貧乏といふ語はおのが子供の時より聞き馴れたり。學者とて富貴を嫌ふにはあらず。又唐人を慕ふにも非ず。經濟の道に疎

ければなるべし。貯蓄せんより本がほしければなるべし。近來の學者は皆富めり。西洋の諺に、學者中の金持、金持中の學者と云へるは、日本にもこれあるかな。

家鴨の聲

家鴨の鳴き聲をよくまねる人あり。終に進みてあひるよりも上手になりぬと。評者の眞顔に語るもをかし。

秋の花

山里の畑の境石垣のきはなごに咲ける鶏頭いとなつかし。紅なる黄なるげにも鶏の冠をひろげたるやうにて。莖も葉もつや、かにたてるが。秋くれて花なき頃まで残れるは、佛花にももれしにやとあはれ深し。

紅菊の今様なれど。さまざまの色してなみ立てるが村雨にゆるらくとゆるゝなど。少女の書讀む机にのぼらんとや待つん。秋海棠の黒屏のもと又は井のはとりなどに植ゑてぞ見たき露にうるほひたるの畫にかける美人の面影見ゆて。春のにも劣るまじうなん。

小川の岸にいと白く咲ける野菊。枯々なる草に交じりて花を見せたる龍膽こそ捨てがたけれ。虫の聲もそゝる寒き夕山一つ越ゆれば。谷の細道をはさみてたゞ月夜なせるは蕎麥なり。近よりて見れば。霜のやうある花の薄赤き莖をおほひて幾町も咲きつゝきたるぞかし。賤がなりはひまで思ひやられて身にしむ色香ぞしたる。甘酒花といふあり。いづこの野にもある小さき草にて。いちごの實とも云ふべき様に咲く。薄紅なるも眞白なるもありて。流をのりきなどしたるいふべくもあらず。我里にては花をも

ぎとりて甘酒作るなどいふ子供遊びの材料なれば。さる名はれひけらし。東京にて何といふか。いまだ聞かず。

闇にも白くさしくる汐にうたれて立てるなど。水邊の秋は芦の花にぞ集まる。乗り捨てし小舟もこゝにあり。漁火の影もかしこにあり。雨少し過ぎて飛ぶ花。雪の如し。漁笛一聲ひゝかましかばとぞ思ふ。

つはぶきの花はたんぼゝに似て莖長く。仲秋の頃より咲きはじむ。我庭にの多かりしに。東京すまひの後なほ目に残るが淋しきなり。

高麗菊と云ふはこれも故郷の庭にありしが。すべてうらがるゝ草の中に。紅なる花の獨り物思ひなげなりし面影よ。

薄いとよし。まだ含める穂の赤きは更なり。老いくづはるゝまであはれならぬかは。月見の宴には瓶にさゝれて歌人を招き。拔穂

の鼻に作られて紅葉見のかへさよともなはれ行くも優なり。
 菊の黄菊こそあれ。賤が垣根などに心のまゝに高くも低くも咲
 き出でたる。又たぐふべきものやはある。庭におひたるがやうや
 う豆のやうにつばみて敷へらるゝも樂し。すべて物は自然にま
 かせてこそ愛すべきを。大輪なり變種なりとて人造をほこる花
 作りこそはいふかしけれ。

折もの

小兒幼稚園より歸る毎に。蟬や狐の面など紙にて折りたるもの
 もて來ては見す。父の名歌得し時の心地もこれにはまさらじよ
 く出來たりとはむればよろこぶ。

吹きあれたり

終夜吹きあれたり。菊宜鶏頭は入りちがひて道に横たはり。朝顔
 は垣ごめに萩の上にぞたふれふせる。根ながら持ち行かれたる
 もあり。ゆくへなく葉の奪はれたるもあり。子供はかゝる中をか
 さわけつゝ、栗ひろひたりとてうち笑む。今宵の月やいかならん。

十五夜

豆芋栗柿の机にうづ高く。水引は薄に添ひて瓶に立てり。家こぞ
 りて調じ出でたる餅の形までさながら山里の十五夜を予なせ
 る。夕を待ちて舟出する人。樓に上る人。世はさまざまなるべし。こ
 ゝには月と秋のみ夜と共に更け行く。

枯芦の色

鎌倉と横須賀との間に逗子と云ふ停車場あり。こゝをおりて八

町も行けば田越村といふ海邊に出づ。今年一月はじめこゝに遊
びしに。冬あたゝかき土地なれば。梅などはや咲き亂れたり。入汐
と河水との出で入る處に渡場あり。あなたの岸に汐湯あまする
家たてり。これにぞ宿る。窓の前には出で入る舟人の呼びかはす
聲近くひびきて。彼方には富士の嶺さへ波路を隔て、向はるゝ
など。すべてかの窓含西嶺千秋雪の詩の様なり。今も思へば枯芦
の色磯波の音。呼ぶに似たり。招くに似たり。

苦樂の故郷

わが書生の境界をおくりしは全く廣嶋の英語學校にあれば。彼
地をば苦樂の故郷ともいひつべし。秋の雨つれづれと降りて火
影ひとり親しむ今宵をかゝる思ひでなくば何にか慰めん。課業
に苦しめらるゝ事六日。山路を過ぎてやどりに着きたる如く。土

曜日の夕を待ち得たるがうれしき。教科書に手帳取り添へてう
ち置きたるのみ。包みも解かず。日影暖き一室に圓居してよしな
し。事語り興するもあり。明日の散歩をはかるにも。貧富たすけあ
ふ交りこそたのもしけれ。日曜の朝は四五人六七人とやうく
に出で行きて。十時頃には寄宿舍中しづまりかへりぬ。おのれは
いざといはれて辞しつるためしなき程の散歩をさなれば。大方
あとに残る事なし。半日の散歩には饒津肱山など常なり。饒津は
此地舊藩主の先祖を祭れる社にて。京橋川の川上にあり。肱山は
其川下に添ひたる岡にて。虎の形したればとて詩人の臥虎山な
ど、呼ぶ。うちひらけたるながめ春日のかすめる頃いとよし。舟
にて渡るあたり砂のしろきにすみわたる水の心地よきを見て。
あはれ此景色を歌によみてと思ひし事は昔なるに。うたは出來
ずして其事のみ忘れがたきもなつかし。

道のり二里もやあらん。山口街道に草津と云ふ村ありて。そこに餅うる店あり。大石餅とて廣島名物あれば。梅など見がてらよく行きたり。今ならばいかゝあらん。其をりは上なき美味とぞおぼえし。途すがらのけしき松原の色など。今一度行きても見ばや。春のやすみに嚴島まうでせんとて。二十人ばかりにやありけん。夜更けて本川より舟出しつるに。眠る間もなくあれを見よとさ。わぎあふ頭もたぐれば。月ほのぐらきに。鹿は目の前に立ちてをり。はやくも鳥に來にけるかな。夜を明して宮にはまうづ。朝風に吹かれて迴廊をめぐる。干潟の鳥居にうち向ふ心地。晝の内を行くに似たり。御山にも上りぬ。紅葉谷にも遊びぬ。今おもふに多くは往事茫茫として。雲霧を隔てし心地をす。又一年これも春の休みに。岩國の友に誘はれて。其地に遊びぬ。小雨ちらつきていと寒きに。錦帯橋を濡れつゝ。渡りしこと忘れもせず。友の父

は詩人なりしが。雪少し降りて晴れたる夕。山寺の梅見んとて。さきに立ちて行く。奥深き處に紅梅の咲きたりしはいかにも。唐詩にも入るべき趣と見るに。主僧はあらずして。寺男の留守まもりぬたるも。思へば二十年前の夢なり。机ならべて。萬國史の譜記は出來しかとむつびし友は無事なりや否や。

獨立心

雨そぼふる道のほとりに。七つばかりの少女下駄の緒のきれしを直し居たり。母など病氣にや。又は人につかはれたるにやあらん。醫者へ行く道と見えて。薬びんかたへにあり。あゝ此獨立心を養ひたるは誰ぞ。乳にもあらじうばにもあらじ。

栗一本

軒をおほへる栗一本あり。人しづまりて燈火くらき枕上にさら
くと音して落ちくるこそ樂しけれ。村雨も時々うち交じるに。
まぎれぬひきは草のもと垣のあたりなどにぞ聞きなざる。
夜明けて見れば。こゝにも二つかしこにも三つ四つと。人待ち顔
なり。梢にはゑましげに口うち開きて雀の羽風もふれなばこぼ
るべきさま。さらにうれし。夕方になりて拾ひ集めたるをはかれ
ば。籠一つに満ちぬ。明日は秋季皇靈祭なり。之を飯にたきこめて。
訪ひ來ん書生女わらはべまでにも山里の大饗せん。

花は見捨てず

萩は枝の末にけしきばかり散り残り。女郎花の遅きは丈高く
ぬけ出で、なほ秋風を我物がほあるもあり。薄こそましるに穂
波うちひろげて。あたりの草をもなびかせつべき様はしたれ。あ

なおもしろし。山里の暮秋見にあすもまたこん。興いたれば柿を
肴に村酒を暖め。興つくれば虫なく窓に歌思ひつゝ。晝寐をぞす
る。富貴ならぬを。花は見捨てず。官位なしとて通行せられぬ野山
もなし。あの松原に落つる夕日。あす又われを迎へて出でん。權
門にこぶるのみが人のつとめかは。

前田藤九郎翁

人づてに聞けば備後福山の前田藤九郎翁歿せりと云ふ。あなか
なし何とかいはん。翁の恩は肝に銘じて世と共に忘れぬ物を。報
ゆるをりを得ずしてやみぬることくやしけれ。おのれ廣嶋に書
生してありし頃。翁は幼き子息を携へ來て。ある人の紹介により。
其一身を同塾の我に託し置かれしより心やすくなりて。度々福
山に遊び其家に宿りし事ありき。いつにかありけん。雪にはかに

降り出で、見る／＼白くなり行く夕暮。某寺の僧と翁と三人して酒飲み居けるが、僧は夜更けぬれば寺へ歸らんと雪踏み出づるに、翁たからかに『名残をしの御事や』と鉢木をうたひいでられしこと、なほ目に耳にあり。翁は昔し箱館戦争に功ありし事。土地の人は誰知らぬものなく、或時は其卒うる士卒の敵に望みて進まざりしかば、自ら大砲にうちまたがり、いざ撃ていざ行けと號令せしなどの話も聞きつ。又士卒をあつかふには其肝をまづひしぎ置くが大事なりとて、行水盥に水をたへ、豆腐を數十丁もつかめて酒のませしをりもありしなどみづから語られし事もおぼえたり。妻を娶られし夜、いざお盃といふ時になりて、まはだかの上に麻上下着て着座せられしといふ事も土地の口碑よのぼりたり。數ふれば十三年前の秋書生の習ひとておのれ窮したる上に重き病に罹りしを子息は急に報じやりしかば、翁は

其時友人集めて小宴を開き居られしが、何となく翁の顔色うれひを含みて見えしかば、齋木文禮氏と云ふ醫師席にありて、如何にせられしぞ。たゞならず見ゆるはと問はれて、翁はさればなり。子息を託せる大和田君はしか／＼の有様にて、憂をよそに見るべきならねば、此手紙を讀みてより酒の味忽ち變れりといひはて、涙をほろ／＼と流されしとは、後にぞ其妻君より聞きし。これに感じて齋木氏もさらば我ひさうけて療治せんと、即座に約せしかば、つひに其家にいたりて、淺からぬ情にうるほふ事と予かりぬる。あゝ翁に救はれてこそ今の我身は得たるなれ。せめて一枝の花だに手向けまほしきを答へぬ墓さへ二百里のあなたにあり。

秋の色

秋の色は園に満ちぬ。同じ薄ながらも植木屋の種なるは官立學校の生徒に似たり。丈高くわれはがほにやうちなびく。野よりもて来て植ゑたるは私立學校の生徒に似たり。けおされたるやうなれど。おのづからなる趣きあり。

騷なほつかれず

櫻馬伴馬の能を譽むる人あり。毀る人あり。ほむる人はよき點のみをあげ。そしる人はわるき點のみをあげて。共に他をいはず。それももうべなり。我信する心をもとゝすればぞかし。わが信する心もどより公平とはいひがたし。然るに雷同してほめそしる人あるこそ心得ね。雷同する人なほ其眞偽までばたゝさずしてやいふらん。二人三人十人と傳へつたふる末々の尾添ひ緒添ひて終に其人の上に禍を及ぼさんとす。まして聞く人は毀る人に

親しくて。そしらるゝ人との疎き中なるに於てをや。かへりみれば四面皆楚歌の聲。虞やゝ汝を如何すべき。されど騷なほつかれず。山を抜く力あに折るべしや。天は誠を照して上にあり。

ハウ嬢幼稚園唱歌集の序

ひばり春風にうたふ。親を呼ぶも愛。子を呼ぶも愛。おとゝひ友達呼びかはすも愛。朝露水音すべて愛ならぬ物なし。子供うち連れて一つの園に遊ぶをひばりも友と見るらん。ひばりをも友と見るらん。望の光はこれを照らして輝きわたれり。ハウ君の楽しみいかにや。楽しみあまりて此唱歌集となる。愛の深さはかるべからん。やよ子供たちよ。昨日もうたへり。今日もうたへり。あすもうたはん。あさてもうたはん。其楽しみいかにぞや。此卷のなれるゆゑよしを忘るべからず。

老婆

田舎あるきするとしていつも立ちよる茶店に老婆あり質朴にて客をよくもてなす此頃も行きたれば近隣より貰ひたる栗なりとてゆでたるをいだせり春はかへさに土筆摘めとて有り合ふ籠をくれたるをりもありき庭の葉雞頭野菊の花など自然の笑顔いとなつかし。

暮秋の花

そばの花しろく蜜柑は黄なり田舎の秋も暮れなんとす稻は大方向りはて、村毎に祭の太鼓いとにぎはし空青く水清く梢の秋も暮れなんとするに。なほ夏ながら残れる螢草こそあはれなれ枯々なる草に交じりて其名の虫のおくれてさまよふかげに

ぞ似たる花の大きさは盛の時の半にも及ばず垣根の朝顔色も形もいかでかくまではおとろへけん黄ばめる蔓を命にてまばらに咲く子供に摘まれて盥の水に浮かびしも昔となれるぞ世の中や松葉ぼたんといふ花しふねく咲きやまんどもせず照る日にたへて又露霜をしのがんとやこゝろさすらん紅なる黄なるおもやせたれど園をゆづるべきけしきなし萩は葉の末に三つ四つ二つにはひも失せてとまれり。

古佛

鎌倉に古佛多し寺の貧しくなるまゝに富める在家に賣りなどしつゝ亂りがはしくならんとせしを内務省は制規を出して社寺の物は動かすべからざる事と定めたりそれも保存金の下賜ありし寺々こそよけれ軒朽ち壁やぶれても修理する力なきあ

たりは、總門の仁王を本堂にうつす事さへ制規に照らして許されねば、みすく、雨ざらしに名作の物を終らせんとす。御趣意の有り難し、御役人様は御情なしと、佛師を訪へりし時に語りいでたり。

師弟寫眞の裡

かの表町の坐敷につゞへて古文讀本を講じつる事いつかは忘れん。石段を上り黒門を出入りせし事人々も忘れざるべし。此寫眞こそ其かみ二十三年十月三日の様なれ。家すでに其家ならず人も中には去りたるあり。今だに懷舊の情たへがたきに、十年二十年の後見たらん心地いかならん。

英譯

雜誌に方丈記の英譯あり『行く川の流り絶えずしてしかも水の水にわらず』を源より来る水にわらずの心にとれり。さらば雨水にやと誰かは笑ひし。譯者の和文知らぬ人にや。英文知らぬ人にや。または和文知らぬ人に讀みてもらひしにや。

寒月

水の如き空に月高し。堤の木立は枯枝がちにわらはなり。川は鏡のやうなるが白く煙りて遠くは見えず。暮秋のながめこそ淋しけれ。花の上わたりしも蓮の露にやどりしも此影なるを、橋行く人の足も今はとゞまらず。あな寒しあなすこし。ひとり歌人の硯をやってらすらん。

八景園

大森村の小高き岡をひろらかよしめて人遊ばする庭あり。八景園といふ。暮秋の頃半日をこゝに費しつる事ありしに。眺望ことにすぐれて。稻の蒔り残されたる田つらの末にゆさけき烟の立ちのぼるなど。神祭る太鼓の遠音にひくまで。すべて心地よき限りなり。鈴が森の松原手に取る如く。羽田の沖に白き帆影の出で入りするもさながら。晝なり。忽の間に市中の俗塵をはなれてかゝる田舎の空氣に浴せらるゝも。瀛車のめぐみならじや。

田舎祭

稻の大方蒔りはてぬ。田舎の秋こそ樂しけれ。木深き森の奥なるはうぶすなの社なるべし。鏡のひかり幣のなびきもかうくしく。かけわたせる提灯の色いとにぎはし。餅柿栗など鳥居の内外に店をつらねたり。村の少女ども新しき袖を連ねて詣でくるも

あり。酔ひて泰平をうたふ聲。れのづからなる神樂笛の音。かれをもこれをも神はよろこびうくらん。今宵は月よし。若い者ども酔のすさびに取らんとにや。相撲の土俵もまうけてあり。

發車

發車の時刻來らんとす。新橋の停車場さして集まる人數は潮の涌く如し。眉をひらきて家に歸るもあれば。うれひをおびて母の病をとふもあるべく。利に奔走する商人。縣に赴任する官吏。様々の世の中數へもつくし難し。忽ちにして鈴鳴り忽ちにして瀛車出でぬ。はや煙も見ぬすなりぬ。千里の別れを送りて去りかぬる人を燈のかけに残すのみ。

菊のつぼみ

昨夜よりの雨やみて青空がちになりぬる夕つ方菊のつぼみの
あす待ち顔に露をうけたるころ心地よけれ薄老い朝顔かれて
すべて物があしき秋の暮なるに畑の茶の花垣のさゝん花の咲
きそめたる。これらも菊の次に數へや添へまし。

幼時の楽しみ

幼かりし日の楽しみは春の蕨取りと秋の茸狩なりき。其日定ま
れば照るく法師といふ物を紙にてこしらへなとして天氣を
祈り。前の夜は寐てもねられず。度々起きては空を見るに。木の間
に星のきらめきたるまづうれし。あくれば辨當を家僕にねはせ
て行くに。何ならぬ野邊もねもしろくて。きのふ手習の歸りに想
像せしたぐひならず。山に入りて蕨をも初茸をも尋ね得し心地。
罪なき望ははや満ちたり。こゝにも三つかしこにも二つと籠に

摘み入れつ。谷におり峯に上りてひるも過ぎぬ。程よき石を見つ
けて落葉かきのけ腰うちかけて辨當ひらくこそ又更に楽しけ
れ。母上の心つくしてにぎらせ給ひつる飯のあるうへに。家僕は
草葉かきわけ清き流をさへ汲みきたりぬ。又は覆盆子茱萸など
を見出だしつる事もありき。かく一日遊び暮して大方歸りは道
より夜に入るに。家路の空遠くうちかすみ。城のやぐらの隠れ行
くなどあはれにて。いかに母上の待ちおはすらん。はやく野山の
おみやげをどこそいそがれしか。

秋の暮

岡に登りて見れば。草薊は花の草ども枯葉をめにうちたばねて
車に積み歸る。向ふの田にはかけはしたる稻のひまより。今日薊
りたるを取り入るゝも見ゆ。空の色水よりも淡くなりて。遠山里

のけむりも物がなしきに。衣うつ槌の音ものつく碓のひびきなど。こゝかして聞こえて。旅ちらぬ身も心ばそし。まして千里の外に親ある人いかならん。

新聞號外

初夜すぐる頃新聞號外を投げ込みて行きぬ。なほざりに思ひし昨日の地震こそわが同胞の上なりけれ。岐阜大垣名古屋の家つぶれ人死は幾百いく千にか達すらん。いまだ數へもつくされず。殊に岐阜の町は四方に火起りて焼きもつくさんずるさまなりといふ。安政以來の變事。天道はたして岐阜の民に私怨なきか。先年の水のをがれて今また此火に入る。親の子にわかれてよばふ聲。夫の妻すくひかねて叫ぶ聲。想像もあたはじ。推量も及ばじ。芭蕉にあたる風のみひびきて夜は更け行く。今夜いづくにか彼等

のたましひは迷ふらん。

露語

今年の春露西亞皇太子の來朝ありし頃より。露西亞語の研究必用なりと云ふ考の。世上に起りたるやうなりしが。たのれはさる時事問題にはあらで。例の語學このむ癖とてよき教師もがなと心がけるたるに。九月に至り二處の學校の同時に開くるを聞き出だせり。一つは露語講習會とて高須某氏と云ふ人會頭たり。一つは青年自助會とて他の外國語の中に交じりて丸山某氏受持教師たり。學ばんとする生徒は時事を感じてなるべきに。教へんとする教師は彼國の宣教師ニコライ派の人とぞ聞く。隣の祭に酒飲まんとするも世の中ぞかし。されば我等も祭の餘德に一盃甜めんとするあざけりをばまぬかれざるべし。

音戸の瀬戸

舟を音戸の瀬戸にとめて風待ちす。海の上は油をながす様なるに。夕日淋しく隠れて名残の色なほ空にあり。繋がる舟我のみならず。愁ふる旅人いさむ商人。同じ梶枕にや起き臥すらん。煙白く蓬窓に靡きて夕飯熟せり。小舟漕ぎよせて賣りにこし魚も焼かせつ。岸には海人の子等打ち連れて家にぞいそぐ。やうく暗みはて、岸にも沖にも添ひ行く火影繪の様なり。櫓の聲舟歌をちここに聞こぬて。眠らんとすれど夢ならず。かゝる舟路を廣島に通ふ頃はしばし、せしが。今は昔になりぬ。昔になれば苦しかりしも忘れてこひし。

例の時刻

家に普請する事ありて大工ども日々に来る。例の時刻に茶をだせば、いとうれしげにあつまり来て圓居す。昨日縁日にて菊かひし人の相場を評するもあれば、火事地震のうはさするもあり。半日の仕事すでにとめをはたして。此簡單なる楽しみを受く。誰かはこれを妨げん。世に之よりまさる楽しみを受けぬ人。上流社會にはたして幾たりかある。

天長節

豊さかのぼる天つ日かげは高く照らして。千戸萬戸の國旗のなびき。君が代唱ふる唱歌の聲。あなめでた。あなゆたけ。誰かはけふの天長節を祝ひ奉らざるべき。垣根の菊軒端の松。彼見ても樂し。是見ても樂し。

下宿屋すみ

硯一面辭書一卷。これを載せたる机は窓に向へり。かたへの本箱には新聞雜誌までつがねてをさめたり。時來れば下婢飯を運び。客至れど送迎のわづらはしきなし。さても簡單なるは下宿屋すみの境界にあり。夜半詩を吟じて隣室の客に怒られし事。おもひいだすごとに今も腹を抱ふ。

冬二十四年の

大根

初霜白き朝ひとりいきはひよきは大根なり。葉色濃きに土より白き赤き根のはだあらはしたるも美し。風の身をさる夕など。賤の女の堀り集め小川に持ち行きて一つづゝ洗ひぬたるは。あすの市に運ばんとてなるべし。馬の背にのり車につまれて朝とく出づれば、羨になり汁にあり。石にねされ酢にひたされ幾人々を

か養ふらん。此價低く用ひ廣き物こそ神のたまものなれ。田舎人のきのふくれたるがまだくりやふあり。寒さ凌がんもこれぞ。客もてなさんもこれぞ。

蟹

五月雨の晴間など。石垣の間に小溝の中に蟹の出で遊ぶいとおびたゝし。赤く大きなるの辨慶。土色にて少さはおちよるとなづけて。糸のさきに紙又は香の物などつけて子供等は釣りあるく。小ささをあまた拾ひ集めて座敷の上には、せ樂しむもあり。是の故郷のさまなるを。此頃小兒に蟹の事問はれていひきかせなす。

觀世太夫の言

わが謠を習ひはじめし頃、年々辰の口の勸工場にて能ありけるが。此能は粗末なれば見に行きたくもなしといひけるを、観世清孝聞きて、そんな事では稽古もいまだし。太夫の藝に場所や装束のよしあしがかゝはる物には非ずといへり。今思へば此一言こそさすが観世太夫の太夫たる處なれ。されど世には場所により金銭によりて藝をかふる人多きを何ぞかせん。

招魂祭

靖國神社の祭なれば詣づ。鏡の光かゝやき渡りて紅白の幣ふさやかに垂れ、神前のそなへもの餅酒をはじめとして例の山の如し。遠くを見ても人、近くを見ても人行くあり歸るありいこふありたゝすむあり。此群集の中に我子の戦死をさゝて氣を失ひし父母もあらん。妻子もあらん。されど此盛典を見ればさらに君恩の

あつきに感泣すべし。世の徴兵さらふ田舎人に。今日の祭こそ見せまほしけれ。

ある夜の夢

身は書生にて近きあたりに住めり。今日は正月元日なれば朝とく家に行きて障子に手をかけ明くるうれしさはたとへん物なし。家は昔の様に例の八疊に父母おはす。雑煮さこしめす所なれば盃をさし給ふ御おもゝちいとうるはし。何か御物語もあり。申しもしつるやうなれど、皆忘れぬ。今日程うれしき日なし。今よりはかくなから日々に参りて、よき御けしきを伺はんと思ふ程に。八疊は失せぬ。父母も失せぬ。涙のみ現にて。夢のなごり何にか似ん。

瀧の川

東京にて紅葉の名あるは海晏寺と瀧の川のみ。されど海晏寺の昔の事にて今はなしといへば思ひもたゝず。瀧の川はなつかしけれど、瀧車出でてより俗塵の襲ふ所となりたるを如何にせん。

今年十一月二十三日かしこに遊ぶ約あり。同行は親類家族すべて七人。あるは辨當を提げ、あるは一瓢を腰にし、そゝろあるさせんとて出でつる道より、あやにくに降り出でたる雨ますくしきる。しきる雨にくし、彼俗塵を清めし心こそ深けれ。濡れ渡る梢まして云ふべくもあらず。山皆紅葉。天地たゞ紅なり。岸を下れば水に落ちては渦まき行くもあり。巖にとまりて友まつもあり。橋渡りてかなたの高みに登る。林間に酒暖めさせんと設けし家あれば、こゝを借り欄によりて見おろすに汀もよし。見返せば彼岸

もよし。黄なるも青きもこなたには交じりて、なほ捨てがたきもとりどりの秋なり。盃もめぐりぬ。歌思ふあり。謠うたふあり。女子どもは木陰の落葉ひらひ集めて濡るゝも知らず。雨なほくらし。簑きて橋行くは里人にやあらん。其外にはたゞ我と紅葉のみ。此けしきに歌なからずはと一人がいへば。記もあるべしとて我まづ書く。

冬いと早し

山里は冬いと早し。庭一面の霜柱たゞ白妙にて。今朝は手水鉢の水も氷れり。されど茶山花南天のわが時忘れぬは。春秋の花にもまさりてあわれ深し。書齋つくるとて來かよふ大工どものたき火してあたれば、われも落葉かき集めて一つにまどぬす。あたゝまらば行ききて萩の枯枝も刈りおかん。來ん春の苗床に霜よけも

作らん。

能面

世に近づきて見ばえする物あり。遠ざかりて見ばえする物あり。共に其得失を異にす。能の面は舞臺なるを棧敷より見る様に作りたれば、手に取りてのみかるべく、しく是非すべきにあらじ。

ぬす人

昔より偽書と云ひ來れるもの。舊事記須磨の記の類いと多し。古人は如何なる考にて自ら骨をりて造りたる物を偽名せしよか。何とてそれ程の腕あるに自らの作を世に遺さんといせざりしにか。いといふかし。此等世をまどはす罪は深けれど、他人の勞を

盗むにくらべておぼさまらん。近頃は人の説を文までもぬすみてわが著書めかすもの數ふるに暇あらず。武悪といふ狂言に「ぬす人は此世ばかりかと思へば冥途にまではやると見える」といふ詞あり。冥途は知らず。我學者の世界にはやるを聞き驚く人今有りやなしや。

お茶の水

水道橋を渡るく見れば。堤の木立大方に散りて夕日のうすらかにさしたる冬がれの様おもしろきに。水には筏に乗りて下るも見ゆ。此あたりは世に御茶の水と呼びて。江戸名所圖繪にも入りたる名所の一つなり。昔し昌平蠻のありし頃は茗溪とも小赤壁ともめでられて。詩人學士の舟浮べし所とぞ聞く。おのれ師範學校に教授たりし日は。朝毎の通りがけに見なれてさも思はざ

りしを。たま〜に見れば中々の絶景なり。

今日も暮れぬ

今日も暮れぬ。寒林に月高し。雀は聲々に藪をさしてぐいそぐ。われのみひとり紙筆の中にうづめられて期しつる半もえ書きはてず。雑誌に原稿おくるべきも今日なり。書肆の頼みもいそぐとぞ云ふ。日の短さに客多し。人事は常にかくのみぞあらん。

小窪

我故郷は小窪と云ふ所あり。物淋しき海邊なるが荒れはてたる小寺。波風に吹かれつゝ磯松の奥に立てり。春のどかなる日には舟遊してこゝに立ちより。漁夫どもの網引くを見て楽しむ事も多かりしが。ある時寺にいてひて祖母上など物語し給ふついで

に。住持は古塚をゆびさしつゝ。あれは平家の落武者の御墓にてこそ候へ。昔し此處に隠れ居給ひしを。赤旗の木の間をもれて波にうつりしかば。終に事あらはれて討たれ給ひぬと。なん言ひ傳しと語る。此一言何となく童心を刺撃して。かへりて後も盛衰記へ圖會など見るに興いよ〜添ひぬ。

なまものしり

我友何がしと云ふ男。ちと負けをしみの強きくせなるが。始めて東京に來りし時。新橋にて瀛車を下り。少しあるきて車を雇ふ。車夫は行く〜案内めかしてこゝは何こなりかしこいづこなと教ふ。彼男腹立ちて。おのれは田舎者にあらずと叱れば。車夫忽に叫ぶ。それはどの目さゝなくて車が引けるものか。となまものしりの著書にも此類多し。

新書齋

村雨聞かんには板屋こそよけれ。茶をよばんにはくりやの近きも便ならずや。あゝ又何をか望むべき。然れども風とほしわろく本をかびさせ。玄關に隣して客の出入に心を奪はるゝは。たへがたき折もありき。これぞ我新築の書齋にうつるいはれなる。六疊の間ひろからねども。床あり書棚あり。日なたばこりすすべき様さへありて。我爲めの安樂國また誰にかうばゝせん。かたるには書中の友あり。遊ぶには床上の樂器あり。さても物足れる住家を得たるに。たゞ廊下の長くなれるのみぞ。掃除する下婢どもの爲に。心ぐるしき。

手習の師

手習の師あり。弟子に告げて曰く。筆は何屋の何々用筆ならざるべからずと。其毛を撰ぶ事やかましきに過ぐ。かゝる教を受けたる人は必ず曰はん。宿屋の坊主筆は我師の流儀ならず。宿帳はつけがたし。郵便局のさきなし筆は我手本の品ならねば。端書も書かれずと。かゝるたぐひを普通教育と心得る人はかにもあるべし。

歌がるた

人に頼まれたる歌がるた書くも閑人歳暮の用事なり。『我衣手は』
『乙女の姿』など書くくゝ思へば。夜をふかし食を忘れて遊びふけりし昔の面影こそ浮び來にけれ。年始まはりすむやおそきと。禮服ぬぎもあへず。家の人々近邊の友達と誘ひ集めていざとすゝむ。れのれはいつも読み役にて雪の夜雨の夕あく事なし。何とて

かくは樂しかりけん。近來は人の取り遊ぶを見物するのみ。更に
交じらん勇氣もいせず。一月とはや三四日の内にあり。希望は第
二の我なる小兒を予おほふ。

盃に告ぐ

わが汝と相なれし日。現在の甘きを親しみて未來の辛きをば思
はざりき。花の春紅葉の秋。われ汝を愛すれば汝ひたすら我に媚
びたり。汝我を見捨てし日。現在の薄情なるを恨みて未來の良友
なるをば知らざりき。雨の日月の夜。我汝を思へど汝は顧みざる
ものゝ如し。あゝ多年膠膝の交を斷たしめしものは誰ぞ。斷たし
めしものにくきか。否々然らず。今予汝の我に眞ある心を悟り得
たる。悟り得て再會すれば汝が媚もわれをおぼらすに足らぬ。わ
が愛も汝を私するに足らず。時ありては寒風身をさる旅宿の夕。

ふたゝび汝としたしまん疎遠なり。とてな忘れそ。昔にかはると
てな恨みる。

除夜

日も暮れぬ神棚に神酒供へ御あかし捧げて家内うちより隔て
ぬ膳に向ふこそ樂しけれ。一年の内毀譽褒貶定まらず。きのふの
味方はけふの敵となる世に。かはらぬは家内の愛と神と君との
めぐみのみ。小兒はあす歌はんとて君が代の歌を口ずさむ。おの
れは酔ひごゝちに膝を入るゝの安きになどうたふ。さるにても
貧しき家の今宵や如何ならん。



夢の世

二十三年一月

涙の記

いはし明治十一年母君に別れ奉りし時の記をか
く名づけし事あり。是にも同じ名おぼせつるは其
をりの面影まで忍びそへんとてなり。

別れ奉りしより九年を経て。父君にまみぬまゐらせしはさきを
とゞし夏なりけり。かねてより家に残りたる身の心ばそさは
年とるにしたがひてまさりゆくをよしや年毎にはかなはずと
も。一年おきには歸りきてよとのたまはせし御詞を其をり始め
て履みえたるをれば。馴れつる門に入るま遅しと待ちむかへつ
ゝ眉うちひらきて喜び給ひし御面影。いづれの時にか眼を離れ

ん。かくて御供して此地にまさせ申し、後はわれうたへば君は
鼓うちあどし給ひつゝ、今は事たらぬ歎きもなく。すでにをどい
しの春は六十一の御賀つかう奉りて。うるはしき御系まひなが
らに。今よりはいさゝか御心をやすめ奉らばやなど。あらましご
とに思ひつるは。すべて電光石火と消えはてぬるころくちをし
けれ。去年のくれよりよわりゆき給ひつる御身は。神佛の力にも
もれて御やまひのみおもりにおもりつゝ、今年一月五日の朝に
いたりて眠るが如くやすむが如くたえはて給ひぬる事よ。あり
あふ人々御枕邊により居てよび奉るうちにも。われは御手をに
ぎり御胸をなでなですれば。猶あたゝかにふれらるゝを。さりと
もと思へど。うれもやうくひえわたりゆく。申す事もふたゝび
きこぬす。さゝぐる水もふたゝびとほらす。今ぞ過ぎこし方のと
り返さまほしく。懺悔の心むねにみちて泣くより外に力なし。御

顔に白布を被ひ奉るにも。此世の御名残いとあはれなり。屏風ひきたてなど。すべてのおさまかはりゆくに。現ともおもはれず。その夜は人々おきゐて御通夜つかう奉る。湯を一つなどの給はする御聲のきこゆる心地して。白布どりのけまほしきを思ひしづめてはうちひそむのみ。更けゆくまゝに火影ねむげに御枕をてらして。残りすくなき香の煙も心ぼそし。いま少しかきたてゝよなどのたまひせしも。此ぬのゝ下なりけるを。なに事も夢なるかな。

あくれば御はうむりの用意すとて。人々あしをそらにいでいりす。母君に別れ奉りしをりの。是はとせよあれはかくせよと。父君ころよろづ示し給ひつるに。今日は誰にかはからん。おはしつる目に尋ねてもおくべき物をと。今更くゆれどもかへらぬことこそ多けれ。ゆふべになれば御柩に白きふすまあつらに敷きてを

さめ奉る。好ませ給ひつる菓子くだもの紙につゝみてさゝぐどはすれど。手わなゝきておん指にや届きけんおぼえぬほどにはやくも蓋はおほはれぬ。親子の別れ悲しとはおろかなり。柩の中にも物いひまほしくや思すらん。うとにても今ひとたび御顔をと思へどかひなし。さのみはと思ひかへしても。又人々の涙にもよほされて御前を立ちもやらず。

夜にもなりぬ。神官きたりてあらこも敷きわたしなど御前を清めしつらふほどに。何事も神わざとかはりはてぬ。人々御前に力なくおきゐて。かへらぬくりことこのべあかすもたゞ夢なり。

又の日はいよゝゝ今はこの御送りとて。明くるより白張きたる者ども入りつとひて。どかくしのゝしる。御門出は九時なり。祭主御前に此事を告げをはりて人々拜み奉る。今こそ誠の御別れよど肝心も身にそはず。御供仕う奉る道すがら。赤き白き旗ひるがへ

し。花に挿よさゝげつらねてねりゆくさま。嬉しとみそなはし知るらんともおぼえず。御墓は青山にさだめつ。例の作法はてゝいざ土をといふこそいみじけれ。みるゝ御柩の土の下になりぬ。御するしの木も立ちぬ。あはれ手向の水ならでいはやとゞくよしもなし。松風よ月影よ。汝が外に誰かは。此御すみかをまもり奉らん。

家に歸れば御靈の前につとふのみ。泣きしめりたる顔うち見てはいふかしがる幼兒の外にたけきものなし。今宵は御通夜の人も家の限なれば詞すくなにて。御おきふしにならし給ひし一間のさびしくありゆかん事なぞ語りつゝけては泣く。八日もあけぬ。朝とく御墓まうでするに。何ならぬ森の烟も。君のますあたりと思へばまづなつかしきこゝちしてゆくほどに。まがぬ御名の遠く見やられたるよ。いそぎ御前にぬかづくほど

例の涙のみぞなぐさめがほなる。きのふは心のまぎれに何事もおぼぬざりしを。けふこそあたり見めぐるに。御墓は原につゞきて西南のはてにあり。うしろは谷間へだてゝ一むら里したしうながめの内にあれば。春よならばつばなぬく子も行きかふべく。秋は紅葉の色にも乏しからじと見ゆ。かねては安らかに老を送らせ申さん處にもと思ひしを。今はせんかたなし。せめて此千代の御すみかをだに御靈なぐさむらんさまにもと願ふにつけても。霜ふかき夜。あめいみじう降る夕なぞおもひわたせば。いかならん。さるにても御墓のかげには残る氷もあるものを。などてかくはと父君うらめしうねもはるゝを。これのみはことわりとやゆるし給はん。

香の煙

二十六年の冬

わが(紀行臺上舟法)甲州の旅して歸りしは七月の末なりしが妻の病るすのは
 どよりねもりぬとて口をひらく力もなくたゞ我顔を見つめつ
 打ちうなづきしさま。今日の前にあり。その時枕のほとりに『我
 室くさしとて香をたく』と詞がきして。

立ちのぼる香のけむりと弱る身の

いづれか先に消ぬんとすらん

と手もふるひながら書きすてたる歌あるを見たり。あまりの不
 吉さに讀まぬふりして取りかくしつるが。是ぞ未來の占方とな
 りしこそかなしけれ。もく。此病のおこりは六月の半なりし
 が。いつもの事とのみ人もみづからも思ひて。其月の十八日には
 實生會の能に病をおして見物に行きし事もありき。『滿仲』を見て
 目に涙うけたる面ざし猶も見ゆるを。是ぞ此世の出をさめとな
 りしこそかなしけれ。八月に入りてはますく。あしく。佐々木醫

學博士の診断にては。不治の症と名ざゝる。の不幸をさへ見る
 に至りぬ。されどよき時あしき時たゞ一やうにはあらず。ある時
 は枕もとに膝栗毛をよませて共に笑ひ興じたる夕もありき。又
 は新聞の來る毎に相馬事件はいかになりしと待ちかまへてた
 づぬる朝もありき。もどこれ腸より肺を侵したる病なれば。身の
 よわると共に心はいよく。するどくなりて。わが物しらぶるか
 たはらより。それは太閤記の何の巻なり。この歌は盛衰記の何の
 冊なりなど。助言する事もしばく。なりしは。今も耳にひびきて
 おもひいづる毎にむかしの心地もせず。庭の半をうちかへして
 畑に作り。小松菜植。ゑなば菜種見んたのしみありと。寐ながらも
 いひぬたり。然れどもその志は遂げずしてやみぬ。死ぬまでには
 故郷の諏訪にゆきて見たしと。すこやかなる時より常にいひた
 り。然れどもその望は果さずして止みぬ。我等には行未知れたる

病を其身には今によくならんとのみ慰め告ぐる心のうち。はり
さけんとせし事もいくたびぞ。

うれひのうち。に九月もすぎぬ。十月も半になりぬ。はやも今宵か
明朝かと醫師にあやぶまるゝ事もしばゝなりき。何の因果に
彼は此世には生れしぞと。くりかへしつゝひそかに燈下に目う
ちぬぐひし夜半は。かぞへもつくすべからず。

はじめは新聞取りえたる手も。やうゝに働きを失ひぬ。きのふ
まで魚鳥の肉のとほりし喉も。一日々々と食慾を失ひぬ。柳に風
のふきたゆる如く。薄に雨のおもるが如く。いつとなく身つかれ
手足よわりて。見るゝれとろへゆくこそあさましけれ。朝夕に
何ともいはで瘦せたる顔に涙をほろゝとこぼしたるは。わが
心にもさところやありしと。今更ふ立ちかへりおもひやら
れてあはれなり。

廿一日の夜より何となくあしきやうなりしが。夜のあけゆくま
ゝにいよゝけしきかはれり。附添の看護婦は醫師をよべとい
ふ。使に應じて醫師直に來れり。此時ははや眼くぼみ瞳ひらき。手
足やゝ冷ぬ入りぬ。されど醫師に目禮したるまでは。なほ人心や
失せざりけん。あつまりぬたる人々涙がちにてまもりをるに。看
護婦は病人の見ひらきたる目を左右の手にてれしふさぎ。唇を
上下一つに合はさするを見れば。はや事されたるなるべし。脈を
よぎれば氷の如く。また呼吸のひゞきを聞くべくもあらず。聲よ
り言葉よりまづ出づるものいたゝ涙なり。せきあぐる胸を何に
かたとへん。きえかへる心を何にかくらべん。

なみださへこぼす力もなきまでに

なりたる人を見るぞかあしき

もはやあきらむる外なしと醫師のいへば。

治むべき家さへ子さへふりすて、

わかれし人のうらめしきかな

水を紙にしめして子どもらにも捧げしめつゝ、

くちびるをうるほす水も今ははや

とゝかぬ人となりけるかな

さてもく

ふたつあるもの、一つを失ひぬ

をさな子いかによにそだつらん

まだしらぬあすの心やいかならん

つまなきやどの秋の夕ぐれ

なごいふ心地やしけん。後には思へど。其時は物もおぼえず。いそぎ使をやりて知らせつる親類どもおひくゝに集まり来て。區役所にとゞけ知人に知らせなと取りあつかふ事あれど。たゞ茫

然として其日も暮れぬ。

亡き人は紫の紋付に着かへて北枕しつゝ、ありつるまゝに臥したり。顔をねはへる白布の下には。昨日まで我を呼びたる唇も横はれりと思へどかひなし。此紋附はまだ父母のもとにありつる日。しきりに好ましくて請ひまゐらせ作りし品と聞くも涙のたねなり。まして其父母の御心やいかならん。

枕もとには守刀をおきて香をたき。水洗米などそなへたり。見ることがうちにかはりゆく儀式も物すどきに。亡き人は知らすがほにぞ打ち眠る。あまり寐すぎてはあしからずや。薬の時刻よ牛乳の時刻よといはんとしては。心づくことたびくゝなり。今宵は通夜とて人々入りこみ亡き骸を取り圍みつゝ、圓居すれど。又物語りいでん勇氣もあし。

火はきぬぬ灰より外にもものもなし

その灰さへに影はどゞめず

なげかじと幾たび思ひあきらめて

みれど子のある身をいかにせん

あすよりは袖のほころびたれ縫はん

かなしき世にも生れけるかな

ともし火の影またくところ。香の煙の冷やかにのぼるところ。あはれ亡き魂も出で去りかねてや音に泣くらん。罪なき幼子はたゞあやしげに。枕のほとりをあちへこちへとながめつゝわたる。

廿三日。晝少し前に柩は運ばれて座敷に入りぬ。その内側には青き眞菰を張り。底には灰を入れ雨紙を敷きて蒲團を展べたり。遅し速し誰も之に入るべきものとは知れど。先づ目の前に先だつ人を悲しむこそ人情なるに。ましてや年月心へだてぬ妻なるを

や。此蓋一たび閉ぢなば。永き世の眠はさめて泣けどもどゞかす。泣かんとすとも聞えじ。正午も過ぎて亡き人をこの中にうつし入れぬ。今ぞ永き世のなごりとて。白布を取りのけ拜せよといはるゝもかなし。拜しをはりて人のうしろにかくれつゝ泣くもあり。見るにえたへで人めもしのばす聲たつるもあり。顔と胸とをのこして。亡き人は茶をもちたる袋の下にかくされぬ。何とて無情の蓋ハ我身獨りを柩の外にはのこすらん。

柩の上には白綸子をおほひて注連繩を引き。前には大榊生花など處もせましと装ひたつれば。いよゝ神さびわたりて。柩のあたり晝もくらし入り来る人ごとに幼子をのこしてゆきたる悲しさを述べ。述べらるゝたびに涙は瀧の如くみなぎりおつるも。我ながら心よわしや。

おもひあまり人みぬかたに向ひては

日にいくたびか袖しぼるらん

夜に入れば通夜とて人々のつとふ事きのふの如し。四つになる
幼子は母なき事をやあやしむらん。家のすみとく本箱のうしろ
など。祖母上の手をひきては尋ねありく。之を見て又泣く人おほ
し。

廿四日葬送の日とて早朝より人々あつまるに。あやにく雨ふり
いでたればわびしさいはんかたなし。出棺は午後一時にて。花に
榊に旗に名旗に持ちつけ出でゆくを見れば。心は身にそはず。
今予柩は玄關を離れ。みるく門をも遠ざかりぬ。亡きから心あ
らばいかに心ぼそくおもふらん。あとには泣聲もほのかにひ
く。先には送りの車かけ失せたり。立ちても居られず。居ても居ら
れず。ひとり裏道よりして車を青山の墓地に走らす。雨ますく
くらく。涙いよくもろし。

柩を墓地の齋場にすゑて。齋主はのりどを開きつゝ高らかに『け
い子の命』と讀む。今まではわが呼びなれたる名の神前に呼ばれ
たるを聞くも夢のやうなり。左にゆふ子(長女)をたすけ右にさ
れ(次女)の手をひきつゝ拜をさすれば。二人の子供の唯父のいふ
やうになりて。日頃のいたづらも忘れたるが如し。式もはてぬ。雨
を侵して。墓地にいたれば。穴は一丈の深さに及びて。柩は見るま
に底にといきぬ。おもひいづればこの月の十二三日にやありけ
ん。腦をいためて苦痛甚しかりし時。家のやねを三つほど重ねた
る高さよりいと深きところにおちいる心地して恐ろしきこと
たぐひなしと。いひつる事ありしが。今日の前に見るさまよど。わ
れさへ身もおちいるやうなり。いざ土をといへば。手づから土く
れをとりて三つ四つなげ入るゝに。柩よりもまづ打たるゝは我
胸なり。

埋みはてゝゑるしの木を立て。人々より贈りし花を垣ねにゆひ
 めぐらしたり。此土の下にのこさるゝ今宵の心や如何ならん。紫
 のきぬ白き衾。今は身を温かにたもたしむる用には立たず。
 かくてもあらねば。車にのりて別れかへるに。青山の練兵場を
 すぐる頃雨はれたり。

ふるものとおもひさだめし夕らら

晴れても晴れぬ我れもひかな

家にては還家祭をありて賑はゝしきやうなれど。心はますま
 す冬がれたり。力ぬけして神前のももし火に向ふこゝろを誰に
 語らん。人去りて夜ふけぬ。子どもらは目さめて泣き。われは寐す
 して泣く。

廿六日。信濃なる明代子より手向けてよとて歌來る。明代子とは
 亡き人の殊に中よくせし妹の名なり。さて其歌

わかれをも告げなんものを死出の山

ひとりはいかでいそぎゆきけん

やがて返しす。

なき人のかたみとたのむ君をさへ

雲のあなたにおくろかなしき

父なる人の讀みて靈前に置き給へるを見れば、

神床にいつくを見ればきのふまで

わが子と思ひしなごりだになし

年月をあとにかへしてありし世の

わが子のゑまひ見るよしもがな

さもあるべしとて又袖をしぼる。

廿七日。何すともなく夜に入りぬ。

ものたらぬ心地のみして今日も又

暮るればむかふともし火のかげ
わが妹のそなへたる歌あり。

かげながら乳兒のゆく末まもりませ

われも力のおよぶかぎりは

廿八日。信濃の小澤氏より初霜といふ菓子を送り來れり。これは
息のある内にとて出だしたてたるよしなるに。間に合はざりし
は是非もなし。

初霜のさぬぬさきにといそぎつる

人さへ待たぬいのちなりけり

庭の茶山花二三輪さきそめたれば。茶の花に取りませて瓶にさ
しつゝ、神前におく。

もろともに植ゑつる花を君にまづ

たむけんものと思ひかけさや

築山の右手に此花の色こきを一本。そのうしろに薄紅なるを一
本など。亡き人の思ひかまへて作りし庭は其まゝに残りて。夜は
影青き月をぞやぞす。

二十九日。ときくふらんしてふらず。

おやと子のしたふ心やかよふらん

しぐれがちなる此頃のそら

けふは日曜なれば。確氷の紅葉見にゆく人の多からんことをお
もひて。

もみぢする確氷の峠ひとたびは

ともにこえんと思ひしものを

墓まうでして見れば。よくさきそるひたる菊を。赤き黄なるさし
ませて青竹の筒にたてたり。わが教へ受けたる女生徒どもの志

なりといふ暮るればさびしきまゝに景樹翁の『待たぬ青葉』をとりいだして讀む。おもひくらべられて胸を刺す事おほし。三十日けふもまうづ。菊にむすびつけて父人の手向け給へるを見れば。

塚のうへのかざりにせんと思ひきや

みし秋ごとの菊のしらつゆ

おのれも同じく結ひつれたり。

花を見て泣かんものは昨日まで

おもはざりしをあはれ世の中

三十一日けふは十日祭として亡き人の親兄弟など集まり神官例の式を行ひのりとを讀む。さらにねもひいづる事かずくなり。人々けふの手向にとて秋哀傷といふ題いだして歌よまんとい

へばおのれまづ。

秋ふけてのこる枯の、花すゝき

たより少なくなれる我かな

聲たて、枯葉をわたる秋かせも

妻ある人はよそにきくらん

酒めぐり飯は出で、もみづから盆とりてすゝむるあるじなれば。一座しめりかへりて話もたえくゝなり。残されし身の事に馴れぬは客もゆるすべけれど。給仕の行き届かぬを催促もせずして。飯なき膳にむかひをる孤子を見つけたる心地。たとへんにもものなし。

十一月一日。よろより家にかへるとて。

あるじなき人の家にあまよひけん

わがやにかへる心地だにせず

去年の今日は日光の紅葉見にわが出でたちし日よとおもふに。

門にいで、おくりし人はおくられて

かへらぬ人となりにけるかな

うの紅葉よりもろかりし命こそあはれなれ。夕かた平川とよ子訪ひ来て、いにし日に會葬せしをりゆふとさゝれの柩の前に拜せしを見てよめるとて。

何ぞとも知らで手向くる玉串を

受くるこゝろやいかに悲しき

など書きて出だせるに催されて。問はずがたりも時うつりぬ。この人は亡き妻とも疎からぬ中なりしかば。また

うつゝとは誰かおもはん昨日まで

かたりし君の今日の門出を

ともよみて手向けたり。いにし七月の末わが旅行のるすに訪ひ來しをり。亡き人はわが端書を示して。今日あたりは歸る頃かとおもひしに。是から身延にのぼるとの知らせなりとて。力をおどしたるさまなどかたる。

四日例の墓まうでして見れば。葬送のよそほひにとて人々よりおくれる花を筒のまゝにて墓の四方にたてたるが。大かたは枯れはてたり。

見ることよ枯れのみまさる花みれば

いよゝゝ遠くなれる君かな

けふはことに空晴れわたりて。日ものどかなるに。稻かりはこぶ賤の男など。うしろの谷間にながめわたさるゝを。亡き人もし心あらば。おもしろきけしきよなどいふらんとさへ。おもひいでらるゝさまなり。枯野の薄のこゝかしこに白くなびきたるひまよ

り見れば。里の梢のこゝかしこ色づきにはひたるなど。すべてその人の歌に入るべきかたみと思ふにたゞならず。かへりて見れば。机のうへに郵便あり。越後の川上喜衛武氏より新聞を見ておどろきたりとて。とむらひおこせるあり。かきろへたる歌は。

心あらば鳴きな明かしそきりくす

夜寒のどこに君やきくらん

返し即ち書く。

きりくす夜寒のどこになくわれを

はるくとひし君のうれしさ

京都の人よりおくりくれたる松茸の靈前にあるを見て。父なる人。

きのふけふ此世のものをたちし身も

松のかをりはめでんとすらん

われも。

いなり山秋風かをる木のもとに

君と遊ばん世ならましかば

七日。我いでゆくを送るとて。幼子二人と下婢二人は玄關にならべり。車に乗りながら。

おくる人たらぬをみても音にすなく

わがなきいへをたれかまもらん

八日。子ども泣きわめくを叱るついでよ。

妻のなき父にもましてかなしきは

母におくれし子らのゆくすゑ

九日。なき人のあけくれ手ならしたる小使帳には『そだのけむり』と題したり。その紙盡きたれば新しくつくるにも。なほ同じ名

をかきつけつゝ。

立てなれしそだの煙の中ずらに

消えんものとはおもひざりけん

十日。四つなる幼子を墓まうでにつれゆけば。ものいはぬしるしの木を母上なりと知りて。頭さぐるもあはれふかし。家にかへれば五寸ばかりの靈主をさして。小さき母上におじぎせんなどいふ。

二人までちひさき子らを捨ておきて

ちひさき人となりし君はや

十一日。陰曆の十月三日にあたれりどて。父なる人。

みはてつる影はめぐりて神無月

けふみか月の夜半となりぬる

冬たちてはやみか月はめぐり來ぬ

ほのかにだにも人はみぬぬを

とよみておくられたり。例のまた。

松がぬにかゝりそめたる三日月を

ともに見し世の人はかへらず

十二日。幼子の寒し〜となくを。女どもいとほしがりて巨燧を開くそバより。四歳なるが『おこたつなかれ』とうたひつるに。人々腹をかゝへてわらふ。是は『おこたる勿れ』といふ唱歌をおこたつの事と心得うたへるあるべし。亡き人はかゝる事をば。人よりもをかしがりしよとおもふに。

うきこともをかしき事もかたるべき

人なきやどに冬は來にけり

十八日。月よし。

月は又まどかになりぬもみぢバの

ちりにし人を何にたとへん

二十二日はや別れたる日にもなりぬ。墓を訪へば。忘れぬ名の文字は筆ふとにしろされて我を待ちよるこぶやうなり。水たむけ。柳の枯葉を取りなどするも。れもはぬ事とていとかなし。昨夜の空を思ひいで。

月みつゝ思ふらんとや思ふらん

ならばぬ露の床にすむ人

二十四日。駒込へゆく事ありしに。かつて小石川にすみつる頃。うちつれ遊びし小川のあたり岡をえの道など過ぐるとて。おもひいづる事つねよりも多し。

もろともにあそびし人は夢なれや

かれのゝ日かげ春もかへらず

冬がれの木かげの落葉かすゝに

かきあつめつゝ昔をぞおもふ

幼児や待ちわぶらん。されど用事すまへの家にゆかれず。



奠の水

蓬摘

廿五年の春

かすむ日の夕川づたひ

摘むよもぎ籠にみちたり

春風のめぐみもふかし

餅につきて孫に持たせて

廿四年の春

此村の祭の市に

あすは賣らなん

わが世界

其一

山をつけば春風は
けふも袂を吹かせつゝ
となりの蝶もさそひこよ
のどけきは我すみか

花まちがほにわたるきり
歎とる身ころたのしけれ
わが花の香も吹きれくれ
世の塵はいづかたぞ

其二

菜を植うれば春雨は
蝶のつばさを廣げつゝ
さきつる花ぞわが曆

あるじ助けてそゝぐなり
出でしは豆かあさがほか
根わけの時は過ぎやせん



廿四年の秋

人ごゝろたがふ世に

其三

池を掘れば月かげは
うしろの川に網入れて
露の玉みんよすがには
せばけれどわが世界

たがはぬは神のわざ

どころぬがほに宿るなり
あすは鮎子やすくひこん
蓮の浮葉もはやいでぬ
はるけきは世の海路

わが思ふ影

其一

おちかゝる
夕日は岡のもみぢ葉に
あはれその

わが思ふ影は霞む雲井に

其二

たれと又

いつかは見ましふる里の

あはれるの

苔に音なき夕ぐれの雨

其三

花すみれ

にはふ野末の朝つゆに

うちつれて

ぬれしも昔ひばり聞くとて

其四

よびかひし

月になきゆく雁がねも

夏の風

あはれたい

今宵はひとり聞きや更かさん

其一

神杉の梢を染めて

今ぞ時いざや遊ばん

山水も我ゆくかたに

夕日かけ残るもまばし

今ぞ時いざやすまん

聲たてゝ愛をぞかはす

ともにあそばん

其二

星ひとり光すしき

虫かごに草つみ入れて

その髪を我こそ撫づれ

たそがれの宿をも訪はん

子もつどへ少女もつどへ

その袖を我こそ扇げ

其三

岩井こす水おとふけて
窓の外を幾めぐりして
あはれわが世も夢なりな

人の世の夢しづかなり
月の霜踏むもいくたび
薄だに我をやとさぬ
晝もありしを

其四

露ながら笑顔をあけて
蓮の葉はうらもへだてず
こゝちよの朝ぼらけかな

白百合は我にぞなびく
我道に起き臥しすなり
極樂はわが心から
おぞや世の人

其五

天ぎらふ雪かあられか

瀧つせの波かしぶさか

こゝに我うまれしあした
柴人のたきゝに乗りて

まだ知らず怒る日かけを
谷いくへ越えんとすれば

其六

うすぎぬに身を包ませて
おそひくる暑さも逐はん
夢さめば母にかはりて

枕する乳兒よよくねよ
寄る虫もわれを拂はん
風車われをまはさん

其七

迎へねど玉のうてゐに
招かねど賤ののきばに
撫子のさく山かけを

遊ぶなりよるひるわかず
なるゝなり朝夕さらす
わがやと、思へば露も
あひやとりして

廿四年の秋

きのふの春

其一

つくづくし摘みしにいづこ
かゝりしはあの森なるを
名も知らぬ草穂にいでゝ

夕づく日わかれれくりて
かすみしはあの空なるを
唯獨たゝすむ野邊に

秋風予吹く

其二

あの野べに立てる尾花は
松風もかはらぬものを
春かへり夏さへ過ぎて

たがむかし戀ひてか招く
ゆく水もかはらぬものを
三日月の身にしむゆふべ
雁は來にけり

廿四年の秋

亡き妹

(人のもこめによりて)

其一

ふるさとの手植のすゝき
きゝなれし唱歌やいづこ
かゝみ川かはれと遠し

秋まちて花になれるを
歌ひつるいもとやいづこ
それかあらぬか

其二

夕月は窓にのぼりて
こゝに來てうたへやいもと
天つそらあふけば遠し

露ながら竹をぞ畫がく
筆とりて紙にも寫せ
たれとあそばん

其三

春風にふきすてられし
朝こどの花つむかほに
あさぢ原虫の音高し

わがそでは露こそ友よ
かゝりしも思へば是ぞ
秋はたがため

亡き妹

この書を今宵もともに
愛をたゞ神にまかせて
筆の山こがらし寒し

あの月をよるくとも
世は春と思ひしものを
人はかへらず

妙義山

つるぎかつるぎならず
雲のうへに削りのこし、
むす苔も千年のいろ
久方の天のうきはし
身ははやく神とぞあそぶ
山彦の空に答ふる

のこぎりかのこぎりならず
あと高く立てる岩山
ふく風も千とせの聲
ふみわたる心地の内に
世はいづく人はいづく
ひゞきのみして

廿四年の秋

廿六年

何をなげく

其一

『淋しき野に咲きたる花

かたれよ我に

何を夢み何をなげく

かたれよ我に』

其二

『いなわが世は唯おもしろ

きのふもけふも

鳥のうたを春の聲を

きゝつゝ今も』

月の影

廿六年

何をなげく

今ぞ霜の色をわけて

水にをどる月のかげ

眠る花は聲もなし

さむき夜風すゞき空に

出でゝあそぶものはたぞ

こだま響くわが前に



草枕

一夜の旅

廿四年五月

旅は面白けれど。妻子の上などの心にかゝるのみぞせんかたな

き。されど今は瀛車の便あれば日がへりも自由にて。一夜二夜の
旅寝にて遠くあそばるゝ世とはなりにけり。

五月のなかば上州に行かんとして。上野の一番瀛車に乗りお
れたり。次の瀛車までの二時間半も待つべしといへば。わがおこ
たりながら何となく心すゝます。岡にのぼりてあちこちと逍遙
するに。いと深かりし朝霧なほしめじめとして。ぬれわたれる若
葉の薄く濃くにはひみちたるなど。何事も忘れてまづうれし。こ
れになぐさめられつゝ。にはかよ心を定めて赤羽までさしてか
ちをゆく。

飛鳥山を右に見て王子をすぐるに。きのふの白雲は緑の波と立
ちかへて鶯の聲もしづかなり。茶ばたけに少女どもうちむれて
若葉つむさまなど見わたしつゝ。人力車にて狭き田舎道をゆく
に。藁屋の軒にさきたる藤の我帽子に觸れて。ゆらくと顔にた

れかゝりたるもうれし。麥は大かた穂に出でたるが。畑によりて
長きわり短きあり。その中を白くも黄にも色とりわけて咲きま
じれるは菜大根の花なるべし。蝶の高く低く遊ぶも見ゆ。
赤羽より瀛車に乗りぬ。ことしのかひこはいかならんなど語り
あふ商人のこゑ。室に満ちていとにぎはし。新聞かた手に巻煙草
くゆらしつゝ、地方の政治を説くもあれば。珠數つまぐりつゝ、佛
の利益をくりかへす老人もあり。歌よまんとする身は窓にのみ
向ひ居て楽しみなほ深し。一村すぐれば一村きたりて。自もひま
なきに。おもはぬ處に大川ありて。帆影の浮びいでたるこそめづ
らしけれ。賤が屋の庭近くゆけば。ながれにうひて。杜若のさきつ
いきたるなど。手もさし出ださば取らるべきにと。思ふまもなく
林に入りぬ。すべて忙がはしき窓の内も知らず。顔なりや。
前橋につけば正午も過ぎたり。晝飯ものする家より見るに。山々

の藍をながして望まると。など。忽に都とほくなり。はてぬる心地
す。こゝにて又乗りかへて伊勢崎にゆく。今ぞ春蠶のはじまる時
どて。老いたる若き。籠かゝへつゝ、桑畑さして。いそぎゆくかど見
れば。うづたかく摘み入れてかへるもあり。わが訪ひたるも。養蠶
する家なれば。たびたゝしき。蕙の數にて。いま十日もたゝば。夜も
寝られぬに至るべしといふ。夕かげになりて。家の童にしるべせ
られつゝ、里なき方をそゝるあるさす。いづこをはてともわかぬ
桑畑にそひゆけば。水はかよはねど。小川のさましたる處にいで
ぬ。堤めきたる道を草花ふみゆきつゝ、くぼめる處におち入りて
は笑はるゝもたのし。あたりはたゞ青みわたれるに。遠く赤城妙
義榛名など。かすみながらにはのどく見ゆ。月はそくきらめきて
風こゝちよし。蛙の聲もさゝふかさまほしけれ。ゆくさき見え
すなりたれば。歸り來て土地のものがたりなど聞く。更にたのし。

あるじの翁はわかき頃ならひつる謠ゆかしければ一つきかせよといふ。姫もむすめもあつまり来ていざいざとすゝむれば。一つ二つ謠ひなぞして庭の若葉にむかふこゝち。旅としもおぼえず。水車の音たえず聞えて夜もふけゆくに。あすの夜は妻子あつめて語り聞かせんと思ふけしきこそ添ひゆくなれ。

廿四年八月

御嶽まうで

武藏の御嶽には時鳥の今も鳴くといふ人あれば。初音さゝにと思ひ立つ。先づ青梅村に住む友だちさそはんとて。立川より瀛車を下りて石がちなる道をゆられく。人力車にて行くに。八月の初めなれば暑さ似るものなし。羽村といふは玉川をせきわけて上水に引く樋口の處なれば。漲りおつる波のけしきを網にして客すくひとむる家あり。鮎焼かせなぞしてしばらく息ふ。川中

にいくつも木を組み横木わたして。それに腰掛けるては釣するも見ゆ。青梅に着けばまづ今宵は此玉川の河鹿を聞きてといはるゝに。疲れこる曲者。こゝろより先に説き伏せられけれ。

暮れそめてそゝるあるきす。農家の蚊遣ふすぶるさま。藁火の影に湯あみするさまなど。見らるゝもあはれなり。里つきて橋あり。これを渡りて石白き河原をすゝみながらのぼるに。山際の薄雲はきれく。の光を見せて。上弦の空を思はしむ。あれかこれかと耳ふりたつれど。つひに似たる聲もせず。はては里人や僻言しけん。河鹿や里人をあざむきけん。なぞいふくも。瀬の音を聞き更かしぬ。執念きは人ぞゝろかなと水底に笑ふらんも知らず。明くれば涼しきはとに。夜をこめて急げど。麓まで三里の道なれば。日はさきがけて山路にあり。沿ひ來し玉川に別れて登りにかゝれば。男郎花さかりに咲みだれて。さはいへどまだしめりが

ちなる杉の中道いとすゞし。御禊の瀧といふありさゝやかなれ
ど水いさぎよく落ちてまづ心を神さびしむ。こゝより路程を數
へはじめて御社まで三十二町の處を、一町毎に赤き文字して町
數と何々講の何がしなど記せる石ぶみを建つ。思ひしよりも苦
しき坂路にて、かの文字を二町三町と讀みつゝのばれば、まだ三
十町も廿九町も残れる事のみ案せられて足すゝます。物商なふ
人などあとより來て追ひ越すかと思れば、はや影もなし。清少納
言の稻荷詣もおもはるゝよといひかくれば、人はすでに見わぐ
る松が根に休みて扇つかひ居たる羨ましさよ。
かくて御嶽の町に着きたるは眞晝も近き頃なりけん。此町には
二十餘軒の宿坊ありて、神官どもの家に客とゞむる習なるに、我
は眺望よき宿をたづねて、つひに東屋といふたゞの旅籠屋に
定めたる。かの石ぶみの恨をも足と共に洗ひすてゝ二階にあが

れば谷深うして水遠く、木立暗うして雲近き造化の筆は眼下に
あり。あはれ過去の苦しみをこぞ此樂しみの母なりけれ。
さても一眠せば、この山の名所案内に童にてもたのみてよとい
へば、宿の姫は近き家々たづねあるきたれど、今日は此里の豪家
の棟上に誰も招かれて出で行く處なれば、頼まれんといふもの
一人もなし。社務所にも常は二三人つめをれば、行きとも異なるべ
けれど、今日はそれさへ一人になりぬといふを、うち腹立てど如
何はせん。さらば畫圖にして道をしへよといへば、宿の翁は筆と
りてこの處よりかくゆき給へなどしるべす。夫をしをりに分け
入れば、分れ道にはゑるしの木など有りて思の外によく知れた
り。草原おしわけ木の根岩かど踏みしだきつゝ、下るは八町の間
どぞ聞きし。されどそれには遠くあまれる心地す。瀧は七代と呼
ばれて苔むす巖を切りどほし落ちかゝる響き。こだまにこたへ

て下界の龍神も一度に舞ひ出づるかと思ふ。あたりの草葉は風なきにうち靡き。巖の碧は日影にもぬれて。ふるはるゝまで寒氣身をおそへり。こゝより又のぼりて綾尾の瀧奥の院にも行く。と聞けど。此度は止みぬ。少しの事にも先達はと兼好法師にや笑はれまし。

ふたゝびもとの道のぼりかへして御社に詣づ。更に高さ山の上
に立てり。めぐりは杉の老木に圍まれたる中に。千木高く仰がれ
給ふを始とし。小さき祠に至るまで神さびわたり。

歸れば湯わかせ置きたればつかへといふ。今は千々の寶も物か
は。たゞ此湯をこそと思へど。明日になれば忘れぬべき。世の中
なる。欄干にあたる景色は夕に忽ちかはりて限なき大海原をた
ゝへ出だせり。眞白に一面たひらなるは。なぎかど見れば渦まき
舞ふ波。ちかき梢を躍りては。越え越えては躍る。こゝかしこに島

山の浮べるは沈みゆく霧に残されたる頂なるべし。あまりの面
白さにうしろの岡までさそはれのぼれば。いづこならん祭文い
ど高らかに讀む聲きこゆ。さて何かの棟上の式はじまれるなら
ん。賑ひ見んも興あるべしと。うちつれゆけば。今ぞ餅をまく處に
て。老いたる若き屋根を仰ぎて。こちへゝと招き居り。散米など
のやうにはらゝと散り來れば。上より下になり。拾はん。とす
るを。流れに沈めて得とらぬもあり。頬を打たれて泣く子もあり。
負けじと競ふ少女どもは。却りて失ひつるに。たゞそのさわざを
見て居たる我等の前に來るをかきあつめたるが。七つ八つにぶ
なりぬる。頼みつる案内のはづれて。頼まざりし餅を得しこそを
かしけれ。棟上のわが爲の幸か不幸か。とて笑へば。姫の御祝儀を
ひろひ給へり。とて喜ぶ。

夜に入るまゝに。暑さは去りて。四五月の頃おぼゆるやうあり。時

鳥の事を問へば稀には鳴く夜もあれど。聲まちつけて獵人の金に代へんとねらひ居れば、聞く事おほかたは絶えたりといふ。されど御祈禱鳥といふは夜なく、鳴きわたれば、それをだにとほこりがに例の翁説く。初夜うち過ぎぬ。かの鳥も鳴かず。此鳥もなかず。

夜嵐もおとせぬ杉の木の間より

わが待つ鳥の名のらましかば

星のいろ水のおとまで時鳥

またる、宵のさまにもあるかな

いざや寐んけふ見し瀧の夢ならで

うつゝに聲のかよひ來もせず

なぞ口ずさむをわが事とや聞きたがへけん。珍しき鳥ぞ神山の梢より鳴きいでたる。すは御祈禱よと翁のいふに。よく聞けばげ

にも御祈禱々々々とよぶやうなり。佛法僧と高野松の尾なぞに稱ふる鳥はこれにやあらん。かく思ひて聞けば。また佛法僧とも呼ぶに似たり。昔は歌よまで時鳥さゝつるを心うがりし人もありしに。今宵は歌いで來たれど時鳥なかぬを何とかせん。さりとて聞きつる鳥の歌はまだえよまぬを。これをも又何とかせん。又の曉は三時にこゝを立ち出づれば。姫は提灯ひきさげて二三町も送り來る。足もともまだ見えねば木の間の星をたのみに呼びかはしつゝ、すあどさきにおりゆく。日ぐらしの聲たかく響きてやうゝ。あたり見ぬをむるに。かの石ぶみをかき探ればはや二十町と讀まれたるぞと。先なる人のいふもうれし。此度は數の減りゆくがたのもしきなり。空の色みづあさを流したるやうにて。どころく、黄ばみわたりぬ。今日も暑くなりなん。かへりみれば過去の山更に高く。前に

は未來の玉川きよく長し。

妙義碓氷

廿四年十一月

妙義の紅葉にとこゝろざしつる事いく秋ならん。されど風雨と多忙とに妨げられて得果さざりしに。今年は安中に知る人出で來て。かならずとの文あり。いでやと思ふほどに。盛過ぎぬべしなと人のかたる。夜の間の空もと俄に旅装して午後の瀛車にて立つ。十一月なかばの事ぞかし。上野をはなれて飛鳥山などゆくゆく見るに。まだ遅からねばいとたのもし。いづこもくく夕日さびしき秋の暮なるに。農家の烟のみゆたかに満ちたるも樂し。この瀛車は高崎までなればこゝに宿る。燈の影に夕飯の箸とる心地。はや旅めきたり。

次の日は安中より人々よみちびかれて山踏にかゝる。送り迎ふ

る楮原の黄なる末より。わがゆく山は文人畫の筆めきてぞあられたる。岩のはさまを縫ひとめて。紅葉のこまかにはへるは。なほ大和畫の風致をも添へたりとや言はまし。梢もおくれず人もおくれず。時雨のおくれたるは。ひとりわがため。の幸なりけり。妙義の賞すべきは岩の奇なるにあり。これを見るには。社の前を左に折れて中の嶽といふ方にのぼるなり。晝も過ぎぬ。かれくの草に龍膽野菊などのささまじれる細道を。乾ける木の葉ふみならしつゝ。行けば。見あぐる限は岩山になりぬ。劔の如きもの鋒の如きもの。鑿の如く鋸の如きもの。天を穿ち雲を削りて立ちつゝ。いける。幾百なるを知らず。羅漢の臂を伸ばして物うちさゝげたるさま。佛の裾をかへして虚空に遊ぶさま。あるは龍と翔り。あるは虎と蹲りて。變幻自在目も及ばず。岩を染め岩を装ひて。黄なる樺なる紅なる。又は散り過ぎて枯枝なるが并み立てるは。近づく

まゝに更に妙なり。見るく、巖の打ち開けゆく間より青空のあらはれたるは、第一の石門とぞいふなる。すべては五六丈もあるべし。なからに廣き穴のとほりたるが肌には、苔むし松おひなどして、神さびたり。天狗の音楽して、夜あそぶといふも、此いたゞきにやあらん。山靈の唱歌して、曉うそぶくと聞くも、かの岩かげにやあらん。夕日は山をくまどるころ、下りに向ふに、山また新に岩いよく、奇なり。兜して迎ふるも、あれば指をさゝげて招くもあり。あゝ、多年の望みを半日に達せりと思ふ間もなく、はやく木の間にあとを隠しぬ。

社は苔みどりなる石段のいと高き上にありて、老木ひるくらく天をればへり、拜みはてゝもとの道に歸れば、夜に入りぬ。今宵は月よし。霜を踏みつゝ、磯部にやどる。碓氷川の川音ひまなきにも、夢はなほ晝の岩間にぞつたひのぼる。

人々はいふ。こゝまで來つるを碓氷のこしてや歸るべきも、みぢに遅くとも有名の工事も見ものなるをぞ。隴を得て蜀を望むは、わが性なれば、いゝるゝまゝに明くるすなはち伴なはれゆく。横川より瀛車をおりて、坂本など經て山路にかゝるに、枯枝にまじる紅葉、さかりにも過ぎてあはれ深し。まして染め盡したる陰を、一筋しらく谷水の流るゝなど、何にかたどへん。工事に此山に鐵道とほさんためなれば、岩を切り山を抜きて、嶮しきを平らげ橋かけわたすとて、數百の人夫あつまり、ゐていとにぎはし。硝薬をうづめて火をつくれれば、數個所一度に破裂して、土を飛ばし、石をくだくさま。地震の劇しきもかくやとぞれもふ。されどなほ人工なり。天工こそゆかしけれとて、碓氷橋をわたり、茶屋ある所まで行けば、谷をへだてゝ、うち向はるゝ山々おそくもあらず。秋より後に更に秋あるこゝちして、ながめつきせぬは、深山のおくな

り。
今宵は安中にやどりて。明日は家にかへらんとす。この人々どか
たるも今宵のみ。淺間の雪見るも今日のみなどり多し。夢忙がし
からんあすの夜こそおもはるれ。

瀧めぐり

月廿五年十一

妙義確氷の紅葉は昨年見たり。此秋は鹽原にや行かん日光にや
遊ばんと思ふ折しも。新聞先づ日光の紅葉見を勸む。我心は動き
たり。一昨日歸りし友人また其美を稱へて止まず。我心はいよいよ
決せり。此に於て十一月一日午前八時五十分の上野の汽車に
乗る。同行の影法師と共に唯二人。飄々然として鉛筆と手帳とを
左右に握りつゝ、幾停車場を過ぎぬ。
今日は一天こゝろよく晴れて。昨夜の雨名残もなきに。蕎麥白く

蜜柑黄なる田舎の秋色。何に譬ふべくもあらず。稻かり入るゝ村
はづれには。鎮守の祭なるべし旗をちらくゝと靡かせたり。
日光の近づくまゝに寒くなることわり。見わたす山々は皆
雪を戴きたるものを。其右なるが赤薙。中なるが大眞子。左なるが
二荒とぞいふ。停車場を出で神山徳平の家に宿を定めて遊覽の
順序を問へば。社内へは既に遅し。中禪寺は固よりむつかし。さら
ば今日は霧降がよからんと曰ふ。曰はるゝまゝに店の男に案内
させて町を上へとのぼるに。名物の盆椀羊羹など賣る店はたご
やと入りまじりて。路の左右に多し。社の前にかゝれる神橋を左
に見つゝ。假橋と云ふを渡り。右の方を山へ山へとのぼる。瀧まで
一里半なるが。大方は登りにて例の肥大の男すこぶる汗にな
りぬ。のぼりつめたる處に茶店一つありて。こゝより谷ふかく見
おろせば霧降の瀧の眼前にねつるなり。紅葉は黄なる紅なる樺

色なるありて目も及ばぬが見わたす限の絶壁断岸を染め盡せり。瀧は生糸を操り出す如く練糸をたばね下す如く唯幅廣き白絹に似て赤地の錦と映じ合ふ。美中の美巧中の巧いかでか人造の言葉もて其千百中の一二をも記載し得ん。

こゝより下る事六町にして瀧壺に達すべし。されど路いとわろしと曰へば靴を草履にかへ傘を杖にかへて下り行くに路はただまろび重なりたる石の上にて踏めば足すべり蹴れば石飛ぶ。すこぶる危し辛うじて下りはつれば瀧更に高うして紅葉まます奇なり。遠目にの書をこそ見たれ。近づけば活動の妙いふべからず。或は刃を束ね突きおとすに似て身を刺すが如く。或は雪礫を握み投げ付くるに似て肝も凍ゆるが如く。山震ひ谷動きて天地ことごとく水中に捲かるゝかどぞ思ふ。

案内者歸路の夜に入らん事を説きていざと勸むれば前の茶店

にしばし息ひて瀧をうしろにすやうくかすかになりゆく水音。うれも早絶えて鳥も歌はず風も吟せず。

道を挟む木々は薄紅に烟りわたりて暮れはてぬ月やうく光を見せつゝ二人の影を枯草の上に畫がきたるも興あり町近くなる頃提灯のこなたをさして來るは我迎へなりといふ。月と火との助けによりて疲れし足は早くも旅宿の二階に投げ出されぬ。

下婢の茶もて來る。名物の羊羹ことに美なり。風呂もよしといふ。浴後の食味更に美なり。寐ころびては大谷川の川音を聞き起さ直りては湯湧かしに水をさす。旅中の幽趣は此時にあり。

明くれば二日。きのふの男つれて中禪寺へと六時に宿を立つ。假橋は霜白く野路にありては霜柱さへ草鞋にさわれり。高嶺の雪は猶あらはにて紅葉の梢に續きたるも奇觀なり。荒澤村と云ふ

に着きぬ。河に臨める茶店に暫し休みて。それより右に折れて峻しき山路をよちのぼれば。左の方に小瀧あり。こゝは裏見に行く路にて初めて見そむる瀧なれば。里人は初音の瀧とも三番叟の瀧とも呼びなすと案内者かたる。裏見の瀧に着きぬ。小橋一つ渡りて岸の上より見れば。幾百の飛龍頭をならべて突き出でたる岩の上より眼下に落つ。何くの鬼神か銀河の水をこゝに噴くらん。誰しの天女か月宮の珠簾をこゝに捲くらん。飛び散る雫は霧となり烟となり。天地一白。朝日は之に輝き合ひて見るく大輪の虹をなせり。

岸より向ふへすべる足を踏みとめつゝ危き岩根を傳ひゆけば。彼の突き出でたる岩の下なり。上には一枚の大石軒をなして額に迫り。前に井關を放ちし銀河の水するどく流れて面を掠む。四面たゞ沫。六合たゞ氷。仰げども天なく。伏せども地なく。不動と

我どが瀧の後ろに残さるゝのみ。

辛うじてもとの岸に歸れば。案内の男待ち居て例の指し曰ふ。今わが立ちしが裏見にして。左右の瀧には白糸相生の名あり。瀧の長さ何れも十丈にや餘るらん。夏は瀧のうしろにラムネやビールを冷しおきて商なふ店出づと。余や人の群集する時節に來ずして。俗客に神界を蹂躪せらるゝ不愉快を見ず。に止みぬること。幸ひなれ。響いよゝゝ。凄く。龍の吟するいよゝゝ。高し。

ゆきくゝて馬返と云ふ處に出づ。日光町より直行一里半といへど。裏見に廻りたれば二里にも満つべし。休みし茶屋に阿部川餅の名物ありといへば。一盆を傾け勇を鼓してのぼりにかゝる。女入堂など打ち過ぎて行く。右も左も黄地の紙に紅の木を畫がきしやうにて。美しさ目を奪へり。

右の山ひらけて瀧二つあらはる。一は方等。一は般若。これ又怒濤

すぎて細波来る如く。味へば特殊の趣あり。
 劍が峯とて幅狭き山路をすぎ、猶岨づたひに登りゆけば。今度の
 左の方に谷をへだて、絹糸二筋かけたる如き小瀧見ゆ。例の男
 指してあれが阿含なりといへど。阿含は華嚴の下流なりと地誌
 に見ゆれば、違へるに似たり。それはともあれ、少女の指か神代の
 幣か。幽趣また數へもらすべからず。

中の茶屋と云ふは、馬返しより中禪寺までの半なるによりての
 名なるべし。こゝには當山名所の寫眞、足尾銅山の鑛石などなら
 べて賣る。熊の子の二つ繋がれたるが、罪なく戯れぬたるも慰み
 の種なり。眺望は今來たる山路の方向に向ひたれば、劍の峯より般
 若方等見し茶屋までたゞ眼下にて、行きかふ人馬豆の如し。過去
 の遠き、未來の近きを示すに足る。登山する旅人の身にはいと
 頼もし。少女來りて茶をさしかへつゝ、力餅を勸むれど、馬返し

餘勇未だ盡さねばと、笑ひて再び杖を取る。

嶮路つきて平地來る。大だひらとぞいふなる。此處は樹木多く立
 ち並みたるが、十の八九は落葉して、鶯にのみ秋の色を譲れり。唯
 見る梢毎に緑長く垂れて、さながら春の柳の陰ゆく心地するを。
 例の男に問へば、霧藻といふものにて、深山霧多き處には生ずる
 と答ふ。面白しとて落ちたるを拾へば、うんなものをとて見かへ
 りもせず。左の方に少し入れば茶屋ありて、華嚴見る人を待つ。こ
 ゝよりやゝ下りて危き岸に立ちたる櫻の木につかまり見る事
 なり。瀧は中禪寺湖よりながれて、高さ七十五丈幅三間に餘れり
 と云ふ。

神の造りし巖壁は虚空にかゝりて、鋸の跡を見せ、碧瑠璃に輝き
 ては、黄纈纈に映じ、さながら想像界中の神境たり。瀧は巖の中央
 を兩斷して、眞逆様にまろび落つ。落つれば吞み吞めば碎けて瞬

間もどゞまらず。雲か烟か雪か霞か。谷たゞ白霧もて満たさるゝ
 を見るのみ。思へば裏見霧降こそまだ人間界なれ。華嚴に至りて
 は獨立獨歩天外に吠え叫びて十方世界を睥睨す。宜なるかな日
 光の美を説く人。指を第一にこの瀧に屈すること。
 中禪寺にも着きぬ。右に雪白妙の男体山を仰ぎ。左に蒼波漫々た
 る湖水をながめゆく。面白き限にて寒風の衣を刺すも忘れたり。
 冠木門を入れれば登拜所と稱へて登山行者の宿に設けたる小屋
 二十餘棟あり。これは陰曆の七月一日より七日間ゆるす定めに
 て。今は人住まぬ明屋なれば物さびし。是につゞきて旅籠屋六軒
 影を列ねて湖水に臨めり。余は取りつきの蔦屋と云ふにやすむ。
 草鞋解き捨て、座蒲團にのぼれば先づ寒くありぬ。外套は山路
 の荷とならんを恐れて日光に残したれば。少女の持て來る火鉢
 を抱へつゝ、鏡の如き水を隔て、錦の如き山を見わたす。この紅

葉かの雪と映じあひて。秋冬の色を一目に見らるゝ神のわざこ
 そいみじけれ。一時も過ぎぬ。飯を命じたれど今少し手間取ると
 云へば。其間に參詣してこんど素足に赤鼻緒の日光下駄を借
 りばさして出づ。鼻緒の赤きは五軒の宿を五色に分けたる目印
 の一つなりとぞ。

二荒山神社中宮祠といふを拜し。立木觀音の開帳を請ひなとし
 て。そこら見めぐりつゝ、蔦屋に歸れば。少女飯を据ゑ來る。一皿は
 鱒の煮肴。一皿は鮭の照焼にて。鳥の羹を添へたり。腹十分にこな
 れたる處にて此山中の珍味を味はふ。居ながらにして八百膳料
 理の箸とる公達の知らぬところなるべし。其上此湖水は維新前
 まで魚類を産せざりしに。一たび其種を放ちしより。年々に鯉鱒
 鮭など蕃殖して最上の漁場となりたるが。今此皿に横たはるも
 其網のものなれば。人事の發達さへ味ひ得られて。樂しみ更に盡

きず。あはれ夏ならば小舟を放ちて歌の濱上野島の名所々々をも探るべきを。紅葉浦菖蒲沼の山影水光の間にも遊ぶべきを。歸路は足いと軽く。忽ちにして中の茶屋。忽にして劍の峯。忽にして女人堂。忽にして馬返しに下りぬ。宿より約束の車夫來りてこゝに待ち居たれば。案内の男に別れて車に乗る。先には裏見によりたれば。間道なりしが。今は本道にて道あしからず。大日池含満淵などを見て。華嚴の下流なる大谷川に沿ひ下れば。夕陽のはや東照宮の森にあらず。名残惜し。踏み平めたる草鞋よ。今は汝と永別離をなさん。

寢すぐして起くれば。朝日は花やかに窓にあり。日すでに上々の天氣なるに。思へば今日こそ天長節なれ。此結構の吉日に。此結構の快晴を得て。此結構の日光を見んとす。そもく。何の幸ひや。急ぎ手水し飯を終りて。案内者一人に伴なれつ。日光町の

ぼる。

社の入口にて切符を買ひ。先づ三佛堂を見て。東照宮の鳥居を右にしつゝ。三代廟に入らんとす。何とて本社を先にせざるぞと問へば。さればなり。うまい物から先に見せては御客様を飽かする恐あればとて笑ふ。然りく。造化の工も華嚴の瀧をば奥にこそ置きつれとて我も笑ふ。

仁王門に入る前に二つ堂と云ふありて。東なるは常行堂。西なるは法華堂なり。堂の由來は姑く措き。西なる方に阿彌陀觀音を初めとして諸天諸菩薩の像。肩を並べ膝を列ねて居給へり。案内者例の口輕に。御一新前は何れも一間間口の主なりしに。佛法おかまひと爲りてより。今の同居の御身と落ちぶれ給へりと云ふもをかし。仁王門二天門夜叉門唐門と次第に入りて拜殿に登れば。僧ありて左右の獅子は探幽安信などと説き示す。目に觸るゝ

ものとして美しからぬは無し。玉垣の右につきて廻れば。龍宮造りの門あり。之を皇嘉門といふ。入れば即ち高さ石段ありて。登りつむれば奥院なり。風しづかに老僧の衣を吹きて。そゝるに懐古の思わらしむ。

もとの道を下りて仁王門を出づれば。茶屋ありて休めしむ。と勸む。こゝにて當山の繪圖祭禮の錦畫など賣るを土産にと買ひ集めて。二荒山神社に詣づ。三代廟と東照宮との間なり。

寶物など見て歸らんとするに。神酒をいたゞき給はずやとて。神前の土器に早なみしとつぎ入れたり。神慮に違ふは勿体なしとて一口又飲み干し。賽錢を納めて行く。旅にも義理おほき世の中かな。

是から東照宮なり。石の大鳥居をめぐり石段を登りて表門に入る。こゝはもと仁王門なりしが。維新の際神佛分離せしむるとて

仁王門をば三代廟仁王門の背面に退去せしと云ふ。今は此門の背面なりし獅子狛犬が前に出でたり。何でも無き事ながら。素人考へを以てやたらに舊觀を破毀せられし感なきにあらず。唐銅の鳥居を入れれば左の方に輪藏あり。是は一切經を納めし建物なるに。何とて獨り残されしぞと問へば。移す能はざりし爲めのみと答ふ。かの佛法退去の鋒先いま一步を誤らば。此壯嚴美麗の經藏も傅大士二童子の像と共に。たゞきこわさるべかりしを。危ふかりしし。石段一つ登れば陽明門まへに峙ちて。鐘樓鼓樓左右に侍せり。金碧璨爛眼を奪ふとや謂ひん。奇工妙技人を驚かすことや評せん。四方面破風造りの樓門。ことごとく鏤むるに純金を以てし。塗るに極彩色を以てし。左右百間の廻廊。すべて花鳥草木の浮彫。美を極め巧を戦はず。筆も寫す能はず。口も語る能はず。此に至つて始めて日光見ざれば結構と言はれぬの實なるを信じ

たり。

唐門にて靴を脱ぎぬかづき終りて拜殿に登れば、此度は神官の説明を受く。總金の柱、金蒔繪の唐戸、丸龍の天井、三十六歌仙の額、一々目を留むる暇もなし。東に將軍家着座の間あり、西に輪王寺宮御休息の間ありて、天井羽目共に驚くべき彫刻のみなり。拜殿と本殿との間に石の間とて石だゝみを敷きたる處あり。其際にある堆朱四本の卷柱の、當時の金にてれのく、八萬兩づゝか、れりと云ふにても、其他を知るべし。

坂下門を入りて八十間の石段をのぼれば、老杉天をおほひて立ちつゞけり。大振舞の跡に茶を呼ぶ心地して興更に深し。其上は奥の社にて、拜殿あり寶塔ありて神さびたり。歸りに、大鳥居内の茶店にて休む。田樂を焼かせつゝ、表門を見あげたる心地。我身まで畫のやうなり。今は木の芽の時節ならねば、袖子を味噌に加

へたる山里料理の暖かなるを、案内者と共に食ひながら日記の材料など聞き集むるこそ楽しけれ。

宿に歸れば十一時になりぬ。食を命じ車を備ひて今市さして立つ。日光街道の並木を見るく、行かんと望みなり。此間二里の道なるが停車場には一時前に早くも着きたり。瀛車は二時四十分なるぞ待遠き。茶屋にわがりて都新聞の讀みふるしを借り寄せ。見ては置き置きては見なすはどに。時やうやく近づきぬとて、切符買ひに行かんと少女の告ぐるもうれし。注文したる名物の鶴も十羽手に入りぬ。日光羊羹もカバンと共に片手にあり。東京の大祭日にも漏れじとて急ぎ乗れば、煙は晴天に靡きて一歩々々と二荒山に遠ざかりゆく。

宇都宮より小山古河など過ぎゆくに、日は早暮れて月白々と澄みわたる空のさま。是も見捨て難き天然の美景なり。稻刈り歸る

人影黒く燈火のまばらに見ゆるなど。陽明門の壯嚴に劣らんや
い。是は墨畫彼は彩色畫の差あるのみ。さるにても此年になりて
始めて日光を見たる迂遠さよなと思ふ程に。上野に着きぬ。千百
の酸醬提灯は天を照して。又更に人造の美を見せたり。

新文林上卷 終

明治廿六年十二月廿五日内務省許可
明治廿七年十一月十二日印刷發行

定價金拾貳錢

編輯兼發行者 **大橋 新太郎**
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 **野村 宗十郎**
京橋區築地一丁目二十番地

印刷所 株式會社 **東京築地活版製造所**
京橋區築地二丁目十七番地



東京日本橋區本町三丁目

發兌元 **博文館**

大和田建樹先生著

國民文庫

全部十一卷 洋裝
正價 一冊(二百頁)拾二
錢 全部十二冊金六拾七
錢 郵稅一冊四錢

國民文庫は、明治廿七年に於ける、文學の新天地を開闢するものなり、國民文庫は、明治廿七年に於ける、詩學の新知己を紹介するものなり、國民文庫は、明治廿七年に於ける、未末廿七年の新社會は、又將に既往廿六年新體歷史の開拓に奮つて鏃を執るものなり、實に此活動社會と共に一新すべき、文學世界の風潮を卜知すべきは此書あるのみ

次目總書本

- 第一編 歐米名家詩集 上卷
- 第二編 歐米名家詩集 中卷
- 第三編 歐米名家詩集 下卷
- 第四編 文學遊戯 全
- 第五編 新體日本歷史 上卷
- 第六編 新體日本歷史 下卷
- 第七編 新體萬國歷史 上卷
- 第八編 新體萬國歷史 下卷
- 第九編 英米文人傳 全
- 第十編 明治文學史 全
- 第十一編 新文學 上卷
- 第十二編 新文學 下卷

大槻如電先生校訂 原田芳五郎君編

遊藝起原

全一冊洋裝
正價拾錢
郵稅四錢

次目書本

- 歌舞音樂起源沿革 ●能樂 ●操人形 ●歌舞伎 ●江戸劇場座譜 ●淨瑠璃起原 ●津節 ●河東節 ●義太夫節 ●一節 ●常盤節 ●蘭八節 ●富士松節 ●新節 ●清元 ●長唄 ●附荻江 ●大薩摩 ●端唄 ●附歌 ●澤 ●哥澤小唄 ●相撲 ●講談 ●落語 ●手品 ●輕業 ●倭獅子

遊藝の起源に就ては、はやく齋藤氏の聲曲類纂、喜多村氏の嬉遊笑噺等類纂したるものなり、近頃は又小中村博士の歌舞音樂略史あり、何れも學者研究の爲には此上なき良書なるべし、しかばあれ其簡にして要なるを求めば如何答へむ本書は即ち此要求に應じたるものにして、況く古書を渉獵し其膏腴を抽擇せしものなり、殊に斯道の博識如電先生は此書に因て始めて明かなりといふべし、世の風流諸君等此書を坐右に置きて參考の資となさば啓發する所また甚だ尠からざるべし

事物原始一千題

全一冊洋裝
正價拾錢
郵稅四錢

吾人の社會は如何に創始せられたるか、如何に變遷して來れるか、如何に進歩して來れるか、吾人の祖先は如何に生活せしか、如何に經營せしか、何を着、何を食ひしか、吾人が住む所の家、食する所の物、衣する所の品、執る所の器、用うる所の財、さては今日存する所、亡する所の文物、制度百般の事物、その原始は如何、中頃は如何、終極は如何、さば歴史を講じ社會學を攻むる者は勿論、何人さ雖も乘雜書を渉獵參稽して、一事一物に就き其原始を知らざるべからざるもの、一千餘條を輯録したり、簡にして洩らす、博と雖も素れず、卷帙小と雖も絶好の社會發育史たり、宇内文明史たり、人々坐右に欠くべからざるの寶典なり、
澁江保君編著

西洋事物起原

全一冊洋裝
正價拾錢
郵稅四錢

本書は編者羽化生英獨三十餘部の書中より摘要編纂したる所にして、天文、地理、政治、社會、學問、工藝、教育、宗教、衛生、商業、農事、家屋、衣服、飲食、器財、貨幣、遊戯、諸禮、動物、植物、雜事の二十門に大別し、更に一千餘條に小別して、各條其の起原を詳にし、讀者をして一目の下に事物の起原を明かにし、文明發達の經路、哲學科學の進歩の状況を瞭然たるを得せしむるものなり

學習院教授萩野由之先生著 寺崎廣業君密書

朝野年中行事

全一冊洋裝
大判密書入
正價拾五錢
郵稅四錢

本書は朝廷の詠集より現今民間に行ふ歳時の儀式等を記
悉くより集め一年十二月に類別して其濼騰並に沿革を記
したるものなり凡民間の儀式など書せるもの今の世には
甚だ稀なるを本書は其要領をつまみ文章も國文にていさ
平易にしむも簡明に解釋を加へたれば一讀して其儀節の
一斑を伺ふを得べしされば本邦の儀式を知らんもの必ず
坐右に供ふべき良書なり

文科大學講師文學士高津鉄三郎先生校閱
下野遠光。山崎庚午太郎兩君編述

日本文學集覽

全一冊洋裝
紙數五百頁
正價五拾錢
郵稅拾錢

本邦文學の趣味漸く吾國人民の知るところとなりたれど
尚ほ未だ不足の感なき能はず、本館先に文學、歌學の
兩全書、及徳川時代の書類を刊行して、大に讀者諸君の喝
采を給はり、冊毎に三四版に至らざるものなかりき、此書
も亦本邦文學の由來及碩學の名論卓説を詳述したるもの
にて、和文史、和歌史、國史及び法制等を詳述し、特に篇毎
に教草といふものを設けて學者の參考となるべきものな
り、掲載せり、其文跡や明晰、其筆力や流暢、殊に有名なる高
津文學士の助筆になれるものなれば、その一大好書たる
推して知るべし、洛陽の紙價爲に貴きを得ば幸甚

石川鴻齋 萩野由之 大和田建樹 諸先生
川崎紫山 佐々木信綱 坪谷水哉 評選
岸上質軒 柳井綱齋 安原健堂

明治千人文集

全一冊洋裝
實價三十錢
郵稅十錢

附明治百名家文集

(井上毅、福澤諭吉、川田剛五先生石版肖像)
小中村清矩、島田重禮

文運の隆盛其化都鄙遠近に普れく山村水郭到る所書を讀
み文を作らざる者なく秀才雲の如く生じて各筆花の研を
競ふ量に弊館題を設けて當代無慮一萬五千
青年の作文を募るや集まる者編之を當代名家に請
編ひて委しく選定し傑作一千編を集めて其
の一二百編を選出して豫定の賞品
を贈呈し且當代大家の名文一
百編を集めて巻首に加へて作文の指
志ある者之を繕ひば以て筆を練るの典則と爲るべく又以
て當時青年文學界の形勢を知るを得べし幸に高評を賜へ